

〈共同研究報告〉

## 総合雑誌『太陽』と『女學雑誌』に見られる恋愛観

——一八九五年〜一九〇五年

リース・モートン

恋愛の概念は、世紀末の日本において近代的繊細さが発展していく上で、大切な構成要素であるという認識が高まってきた。本論は、一八九五年から一九〇五年までの間の総合雑誌『太陽』と同人雑誌『女學雑誌』を調べて、恋愛観がどう発展し理解されていたかを検討するものである。これは、国際日本文化研究センターの鈴木貞美教授主宰の共同研究「総合雑誌『太陽』」の一環である。ここでは、歴史上「恋愛」という観念が現われる現象の様式として、文化、とくに文芸に焦点を当

ている。『太陽』のような総合雑誌を経験的に検討することにより、文化・文芸史を書き換えていく基盤を築き、そして日本とヨーロッパの思想様式を比較文化的に検討する土壌を確立しようというものである。

### 序

本論は、一八九五年から一九〇五年までの間の総合雑誌『太陽』と同人雑誌『女學雑誌』を調べて、恋愛観がどう発展し理解されていたかを検討するものである。この調査は、京都にある国際日本文化研究センターの鈴木貞美教授主宰による多分野にわ

たる共同研究「総合雑誌『太陽』」の一環である。

雑誌『太陽』は、知識人中産層の読者を対象に広く大量に流通された総合雑誌で、話題は政治・文学・法律・社会・教育・皇室・商業・女性・家庭・科学など、広範囲に亘っていた。一般的にいつて、その当時の「知識人中産層」というのは、男性なら中学校を出た者、女性ならそれに準ずる学校を出た者を意味していた。比較するのは難しいが、今の日本なら高等学校あるいは短大卒業者に相当するだろうか。この雑誌出版のアイデアは海外のモデルから出ているらしく、英国の『Blackwood's Edinburgh

gh Magazine] (一八二七年) がそのモデルである可能性の高い雑誌として挙げられる。つるほか、『British Illustrated London News』(一八四二年) や『アメリカの『Vogue』(一八九二年)』、『Scribner's Magazine』(一八八七〜一九三九年)、『Harper's New Monthly Magazine』(一八五〇年) などといった総合雑誌が、刊行期間中、その出版社である博文館に影響を与えた可能性もある。

『太陽』は、一八九五年一月から一九二八年二月まで刊行された。三三年間にわたるその総数は五三一号に上る。<sup>(1)</sup> 創刊号には二八万五、〇〇〇部発行と記されているが、五年後の第五卷第二五号には、「十數萬部」が印刷されたとある。雑誌に掲載された数字よりも警視庁の統計の方が、実際の流通部数の指標として信頼性が高いという永嶺重敏の言葉を鈴木貞美は引用している。警視庁の一八九五年の数字を見ると、その一年間に、合計一一八万二、四四八部の『太陽』(一八九五年には一一号の普通号) が刊

行されたとしているという。また、同じ統計によると、一八九五年刊行の各号の平均部数は九万八、五三七部と推定している。<sup>(2)</sup>

とにかく、『太陽』の流通部数は、他の日本の雑誌の群を抜いている。日本でその当時、最も広く読まれ、最も高く評価されていた雑誌であることを疑う余地はない。<sup>(3)</sup>

一八九五年から一九〇五年までの間に第一巻から第一一巻第一六号まで一八九号(普通号と増刊号)の『太陽』が刊行された。

一年間に刊行された号数は、最小一一号から最大二七号まで上下している。一八九六年と一八九七年はそれぞれ二五号(第二巻と第三巻)が刊行されるなど、最初の五年ほどは号数が高く、一九〇〇年から一九〇五年には一年間に一五号から一六号あたりで落ち着いている。各号の平均ページ数は、およそ二五〇ページである。第五卷第一九号(一八九九年)の現行改正条約類纂目次や、第七卷第六号(一九〇一年)の新条例目次、第一〇巻第一五号(一九〇四年)の日露開戦史目次などといった特別号も種々

刊行されている。しかし、私の調べた限り、本論の研究データベースとなる一八九五年から一九〇五年までの一八九号のうち、「恋愛」という言葉が使われているのは普通号に限られている。

予測したとおり、愛に関する言及がある記事の大部分は、雑誌全体のうちの限られた欄だけに収録されている。題に反する内容の記事や関係の薄いものは除いて、恋愛に深く関係のある記事および小説・詩を合計七六件見つけた。このリストを作成する上で、小説や詩よりも、分析的あるいは記述的な記事を優先したが、ときには恋愛の理想像にはつきり関係のある材料(従来の人情本風のロマンスではないもの)を見つけたときには研究の対象として採用することにした。ほとんどの材料は「家庭」(雑誌に付録されている英語ダイジェストによると、「家庭」は「Domestic Economy」と訳されている)欄、あるいは「小説」、「文學」、「文藝」(英語ダイジェストでは、それぞれ「Fictions」、「Fiction and Miscellaneous

Notes)、「Balles Lettres」と訳されている)欄に掲載されている。しかし、男女間の関係や女性の教育問題など、愛というテーマにかかわりのある問題を取り扱った記事が、「教育」(ダイジェストでは「Education」)や「海外事情」(ダイジェストでは「Foreign Intelligence」)欄にもときには見いだされる。

本論は、七六件の記事を詳しく記述するのではなく、研究の対象となっている期間において、『太陽』に見られる恋愛観のスナップ写真的な紹介に重要性を置いている。本論の研究対象期間である日清戦争後の一〇年間は、日本史のなかでクライマックス的な期間であるために『太陽』研究の第一段階として選ばれた期間である。日露戦争でロシアに対する勝利をおさめた日本は、アジア世界の中小国と見られていた立場から世界の大国へと脱皮した。同じく、思想・文学・文化史上でもこの時期は、夏目漱石(一八六七―一九一六)を始め、森鷗外(一八六二―一九二二)、与謝野晶子(一

八七八―一九四二)といった二〇世紀の大作家が文芸界へデビューした時期でもある。文芸史家の磯田光一は、この時期(明治三〇年代)のことを、社会的変換が人間の心のうちに食い込んできた時期と描写している。<sup>(4)</sup>新しい時代が本格的に登場し、古い江戸時代風の政界および思想界はようやく姿を消したのである。文化史家の山崎正和は、日本の中産知識階級にとって、時代の変化がにわかになりに重く心の圧迫になり始めた時期、精神的な失速状態に悩み始めた時期として一九〇二年以降の時期に特別な光を当てている。<sup>(5)</sup>したがって、世紀末から新世紀へかけての時期に、恋愛観がどう姿を現わし、そして日本人にどう解釈されていたかを描いて恋愛観を評価するという目的には、『太陽』から得られるデータは、他にはないユニークな情報の宝庫である。

#### 明治時代の恋愛観

恋愛に関する明治時代の考え方を要約する前に、江戸時代の文学がその後継者に残

した遺産を簡単に整理してみたい。津田左右吉(一八七三―一九六二)の『文学に現はれたる我が國民思想の研究』は、一九一六年に書き始められ、ほとんど半世紀にわたって書き換え、書き足されて、一九六五年にようやく全五巻が出版された日本文学史の大作で、一人の学者による日本の文化・文芸史探索の試みとしておそらく最も高く評価されている業績であろう(小西甚一の最近の著書『日本文芸史』は例外としてもいいかもしれない)。そこで、江戸時代の文芸に表わされている恋愛についての津田による解説を出発点として論を進めていきたい。

津田は、元禄年間(一六八八―一七〇三)の美術・文芸の黄金時代の後、文学、とくに恋愛に関する文学は衰退の一途をたどったという。この衰退は、ある意味で、江戸時代後半を通じて恋の自由な表現を抑制することになる儒教道德の社会全体に対する影響力の増加を反映している。散文形式として当時主要な位置を占めていた草双紙や

読本に描かれている恋は、戯れの趣向を見せている。津田はこれを、歌舞伎と浄瑠璃で最盛期を迎えた情熱の文学的な表現からの墮落を示していると結論している。津田はまた、女性（儒教道徳の観点から）邪悪なものともみなされ、それが世話浄瑠璃などの型にはまった悪女の登場を促したといっている。浮世草子の物語では、異性関係を描写する際の筆致は愛を抑えて性欲を優位にしている。遊廓における性的関係のトレードマークである「色ごと」を愛の表現とはいいたい。このような傾向が当時の実際の事情をどの程度写し出しているのかわかることは難しい。<sup>(6)</sup>当然、「愛」という概念を伝えるためにいろいろな言葉が使われているが、「恋愛」はその中にある。

富田康之は、「色ごと」を後世の「恋愛」という概念と並べることができないという津田の主張によく似た主旨を最近の書で述べている。しかし、男女の地位の差や階級社会などといった時代の制約を考慮すると、そのような情欲は恋愛の切羽詰まった状態

を模倣しているといっているほどに近づいていた。富田は、人形浄瑠璃、とくに近松門左衛門（一六五三―一七二四）のものにその証拠を見ている。<sup>(7)</sup>西田勝もまた津田と同じく、読本に恋の情熱の証拠を見いだしているが、江戸時代の婚姻形式では必ずといっていいほど社会的自由が失われていることから、このような情欲を「恋愛」と同じカテゴリーに入れるわけにはいかない。<sup>(8)</sup>

富田は、当時の人々がどのように愛を経験していたのかを知るために江戸時代の遊廓文化に注意を向けている。歌舞伎や浄瑠璃のほかに、一六八八年に完成した藤本箕山（一六二六―一七〇四）の有名な『色道大鏡』のような「色道」の教本が、楼閣の遊女がどれほど深い熱情を抱いていたかを描写している。遊女の愛の誓いの究極は指を切り落とすことであつた。<sup>(9)</sup>

野口武彦は、先ず文献学の観点から論じている。肉感的・色情的な意味合いを持つ「恋」という言葉は、江戸時代の語彙として存在はしていたが、論語などの儒学の基

本的な文献には見当たらないという。しかし、予言に関する神秘的な書『易経』には、この言葉がエロティックな意味をもって使われていることに注意を引いている。「愛」という言葉は、中国と日本でも伝統的に人類愛あるいは愛国心という意味の愛を示す言葉として長く使われてきた言葉で、必然ながら徳川の儒学の書にもさまざまな形で出てきている。そして特に、偉大な中国の哲学者である孟子を、人間と人間の間の普遍的な関係という意味の「愛」という概念に結びつけて挙げている。主要な儒学の思想家として読まれていた孟子にとって、愛の概念は義務に近いものであつた。儒教の思想的伝統から出ているこれらの意味は、本質的に中国のものであると野口は見ている。<sup>(10)</sup>

野口は、江戸時代の国家思想であつた日本版の儒学では、遊廓と蓄妾制度が公認されてきたことを述べている。男女が自由に交際することは非常に厳しく制限していたが、遊廓には社会制度の中で市民権を与

えていたわけである。これは、例えばキリスト教と明らかに対照的である。<sup>(11)</sup>これが日本の古代の色好みと重なって、エロティックな快樂の美学へと移っていくのを野口は認めている。

この時期に書かれた恋愛の文学では、恋愛の対象は理想化されたお姫様から花魁へと移っていることを野口は記している。古典的な愛の美学からあからさまにエロティックな美学への移り変わりの一つの例として、古典的な恋愛物語の原形である一世紀の『源氏物語』のパロディとしての井原西鶴（一六四二―一九三）の『好色一代男』を挙げている。野口は、江戸時代の文学によく使われている、色道におけるスマートさと手管を意味する、「粋」や「通」といった言葉の使い方は、恋愛を遊びと見る観点を示しているという。当時の文学には恋愛ゲームが本気になり過ぎて、ほんとうに相手にいれあげたりするところくなことはないという戒めがさまざまな形で見られる。そのような強い感情は、身分のタブーを破

り、堅い身分階級制に固まった儒教の真髓を乱すことになるというわけである。このような美学体制は、一九世紀の終わりに西欧から恋愛に関する極端な考え方が入ってきて一掃されることになる。<sup>(12)</sup>

野口はまた、「江戸時代には、優雅な恋愛とその異端であるトリスタン主義（トリスタンとイゾルデのような密通にこそ恋の喜びがあるとする考え方）に対応するのは、男女間の愛ではなく、西鶴の『武家もの』や『葉隠れ』に現われるような同性愛であった」という。<sup>(13)</sup> 男の愛と心身をなげうつ恋との間のつながりをはっきり認めるポール・シャロウも同じことをいっている。シャロウは、「男性間の献身的な愛」（その一番いい文学的な例は、西鶴の『男色大鑑』、一六八七年に見られる）が後の男女間の献身的な愛を表現するモデルとなったという。<sup>(14)</sup> しかし、野口もシャロウも、同性愛が恋愛と大きな共通点があるといっているわけではない。

一九世紀初頭、恋愛をとくにそのテーマ

に取り上げた小説ジャンルが現われた。

「人情本」がそれで、為永春水（一七九〇―一八四三）<sup>(15)</sup>がその最も重要な作者とみなされている。春水の最も有名な人情本『春色梅兒譽美』（一八三二―三三）の主人公、丹次郎に対する米八とお蝶という二人の女の激しい感情の描写は、当時の読者に多大な衝撃を与えた。しかし、五〇年ほど後には恋愛という観念は知的想像力をすっかりつかむようになって、人々はこの言葉がどういう状態を意味しているのかそれなりの理解をもっていたが、そういう理解をもって、春水の斬新な口語体の使用、生き生きとしたせりふ、移り気な丹次郎と惚れぬく女たちを描写することはできない。<sup>(16)</sup>

野口は、恋愛という観念によって集約的に描かれる恋愛の景観は、一八八〇年代と一八九〇年代に明治の文士たちが吸収したキリスト教の愛の観念に等しいと見ている。<sup>(17)</sup> しかし、この新しい概念が吸収される前に、従来使われていた言葉から、この新しい愛の理想を区別するために、新しい言葉を作

る必要があった。

「恋愛」という言葉が日本の文献に初めて現われるのは、一八七〇年に出版された『西國立志編』で、これは中村正直（一八三二〜九一）がサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の『Self Help』を和訳したものである。ロマンティックな愛を意味する「恋愛」という熟語は、W・H・メドハースト (W. H. Medhurst) が編集して一八四七〜四八年に上海で出版された『華英字典』(English and Chinese Dictionary) に出しており、この辞典は、永峰秀樹（一八四八〜一九二七）が一八八一年に邦訳をつけて出版している<sup>(18)</sup>。メドハーストの辞書は極東地域に広く普及していた。しかし、日本における再版の数の多さと、後の辞書編集者にも影響を与えていることから見て、それ以上に重要なのは、香港で一八六六〜六九年に出版されたW・ロブシャイド師 (Rev. W. Lobscheid) の編集による『英華字典』(English and Chinese dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation) であっ

た。森岡健二は、中村によるスマイルズの『Self Help』とジョン・スチュアート・ミルの『自由之理』の英訳にロブシャイドの字典の影響が大きかったと考えられるという<sup>(19)</sup>。ロブシャイドの字典は、後に中村正直を校正者とする学者チームによって和訳されているが、その中に有名な教育家の津田仙（一八三七〜一九〇八）の名前も見える。和訳『英華字典』は一八七九年に東京で出版されている。この本のあとがきに中村は、和訳は一八七二年に始められたが、さまざまな困難にあって、完成までに最初の予定より長くかかったと書いている<sup>(20)</sup>。従って、「恋愛」という言葉が「Love」という言葉を訳すための漢字二つの合成語という形で、メドハーストの字典に最初に現われてからロブシャイドの字典へ「恋愛」という言葉を使っていることから、ロブシャイドの字典はメドハーストの字典に追随したと仮定してよいだろう）、そして中村正直訳の『西國立志編』までの経路をたどることができ<sup>(21)</sup>。

中村は、一八八六年に訪英したとき、『Self Help』の改訂版をH・V・フリーランド (H. V. Freeland) から受け取った。中村によるスマイルズの訳は、脱落部分が多い上に、原本にない文飾が見られ、翻訳というより不完全なパラフレーズであった<sup>(22)</sup>。しかし、「Love」の翻訳という点では、かけ離れているというわけではない。次に引用する文章の英語の原文は「The curate is said to have fallen deeply in love with a young lady of the village, who failed to reciprocate his affection.」<sup>(23)</sup>となっている。この文章は、靴下編み機を発明したウィリアム・リー牧師のことを書いており、中村訳（第二章、第二部）では、「李嘗<sup>レイカウ</sup>テ村中ノ少女ヲ見テ深く戀愛シ、ソノ家ニ行キタルニ……」<sup>(24)</sup>となっている。明らかに、「恋愛」という言葉は、「Fallen deeply in love with」という文を訳すのに使われている。藪禎子は、中村の訳に「恋愛」の意に合うような叙述は全くないと言っている<sup>(25)</sup>。

一八七一年に英語で出版されたスマイル

ズの『Character』の中村による邦訳は、一八七八年に出版されているが、日本で初めて恋愛の意に適う叙述が与えられている。

「人ニ戀愛ノ情アルハ天命ノ性ナリ、コレアルガ故ニ此世界常ニ新鮮ヲ保チ天好ヲ失ハザルナリ、コレアルガ故ニ人性常ニ諧和スルヲ得ルナリ、且ツ此物タルヤ一種ノ光輝アリテ少年ヲ照射シ一團ノ暈影アリテ世上ヲ圍繞セリ、此物タルヤ現在ニ光ヲ放ツノミナラズ又後來ニ光ヲ施セリ」といっている。<sup>(26)</sup> 原文と比較してみると、神の愛を強調する原文より、中村の訳は恋愛を強調する傾向があることがわかる。原文を引用し

てみる。『It is by means of this divine passion that the world is kept ever fresh and young. It is the perpetual melody of humanity. It sheds an effulgence upon youth, and throws a halo round age. It glorifies the present by the light it casts backward, and it lightens the future by the beams it casts forward.』<sup>(27)</sup>

中村の「恋愛」という言葉の使い方から

わかるように、そして他の辞書研究によっても実証されているように、このころから「恋愛」という言葉は、英語の「Love」の訳として使われていたが、男と女の間のロマンティックな愛という意味を特に伝えるためのものであった。これは、同じく「Love」の訳として使われていた「愛」という言葉が、親子の間の愛、あるいは友愛、人間愛という意味だけに使われていたのは対照的である。<sup>(28)</sup>

明治も中期になると、恋愛観、結婚、女性の地位に関して革命が起こり始めていたことは疑う余地がない。著名な外交官であり、後に文部大臣になった森有礼（一八四七—一九一〇）は、先駆的かつ啓蒙的な『明六雑誌』に一八七四年五月から一八七五年二月まで、まとめて「妻妾論」と呼ばれる論説を連載して相互に対する愛と貞節に基づき、法的な契約で結ばれた婚姻関係を提唱した。一八七五年に森は、互いに愛し尊敬することを誓うという公開結婚契約を広瀬常子と交わしてこの理想を實踐した。<sup>(29)</sup> アイ

ヴァン・ホール (Van Hall) によると、このような西洋式結婚はたぶん J・S・ミルの有名な解放論者の小論文『The Subject of Women』（一八六九年）からインスピレーションを受けたのであろうと推察している。後に問い詰められたとき、森は「妻妾論」で夫と妻の「地位」は平等であると論じたが、男と女の「権利」は平等であると主張はしていないと述べて、その立場を明確にしている。<sup>(30)</sup> とにかく、江戸時代の愛と結婚に対する観念を急進的に修正したこの論文の重要性は大きく認められるべきである。

森の契約はキリスト教に言及しておらず、キリスト教の愛に対する観念の重要性を説く野口武彦の主張を思い返してみると、ロマンティックな愛、恋愛の女性崇拜的理想は、この時点で、まだ明治の思想の主流にはなっていないと結論してもよいと思う。しかし、一八八五年に巖本善治（一八六三—一九四二）が『女學雑誌』を創刊して以来、そのような傾向がみられるようになって

た。巖本は雑誌の創刊と同じ年に洗礼を受けてキリスト者になっており、まもなくいかにキリスト者らしい愛の姿を言葉で描き始めている。<sup>(31)</sup>『女學雜誌』一八八八年四月号に掲載された評論「理想の佳人」で彼は若者や遊女を排斥し、真実の愛をほめたたえている。

そもそも、娼妓藝妓のごとき下賤卑劣なる女原は、吾人もとより堂々として之を斥けずして可なり。彼等は只だ、慾と金とあるを知つて、正義正道の何物たるを知らず……嗚乎真正の愛は、必ず先づ相ひ敬するの念を要す。既に之を敬せず、之が靈魂を愛せずして、何如で真正なる伉儷の娛樂を得んや。<sup>(32)</sup>

巖本の思想に対する反対勢力は無数にあつた。その中で最も著名なのは徳富蘇峰(二八六三〜一九五七)であつた。

若いころは民主主義の信奉者として名高かつた蘇峰は、のちに保守的な国粹主義者

になつた。<sup>(33)</sup>一八八七年二月に彼が創刊した雑誌『國民の友』に蘇峰は「愛の特質を説て我邦の小説家に望む」を書いている。これは、伝統的な日本の美文が明らかに触れることを避けている美德、愛について書く小説家に対する警告である。「愛」という言葉で蘇峰はすべてを包み込む思いやりを意味している。

愛は實に斯の如きのみ、愛は寛忍をなし、人の益を圖るなり。愛は己の利を求めず、不義を喜ばず、眞理を喜ぶなり。<sup>(34)</sup>

蘇峰の「愛」の観念は、キリスト教の原理からと同程度に儒教道徳から借りてきたものようである。しかし一八九一年七月の『國民の友』に掲載された「非恋愛」の中で蘇峰は、「愛」と「恋愛」をきつぱりと区別している。若い男女に語りかける形のこの評論で蘇峰は、恋愛を徹底的に叩いている。

人は二人の主事に事する能はず、戀愛の情を遂げんと欲せば功名の志を抛たざる可らず、功名の志を達せんと欲せば、戀愛の情を擲たざる可らず……人一たび戀愛の擒となる時は、總ての自由は必らず此が聖壇に捧ぐるの犠牲たる……遂に戀愛の擒となり、戀愛の外何事をも思はざるに到る、人此に至りて、既に生きながら死せる也。<sup>(35)</sup>

恋愛は道徳に叶うか、恋愛は明治国家のイデオロギーに沿うものであるかどうかという疑問を中心に展開される恋愛論争の始まりをこれらの記事は示している。著名なジャーナリストの山路愛山(一八六四〜一九一七)は、『女學雜誌』一八九〇年一月号に掲載された「戀愛の哲學」の中で、明瞭に国家主義的な立場をとっている。

嗚呼、人の心靈と身軀とに革命を行ふ戀愛よ。趣味想像の新しき境域を開拓

する戀愛よ。英雄を作り豪傑を作る戀愛よ。家を結び國を固むる戀愛よ。余は大なる詩人出でて爾を書き誤りし幾多の小家敷を墮若たらしめんことを望む。<sup>(36)</sup>

蘇峰の恋愛攻撃に対する返答も多数現われた。巖本善治は『女學雜誌』一八九一年八月号に「非戀愛を非とす」という小論を発表し、「戀愛は神聖なり」といつてキリスト教的な恋愛観の立場を明確にした。<sup>(37)</sup>

しかし、最も特記すべき返答は、詩人北村透谷（一八六八〜九四）が『女學雜誌』一八九二年二月号に二部に分けて発表した「厭世詩家と女性」で、恋愛論争をまったく別のレベルに引き上げた。

透谷は、著名な民主運動家の娘で聡明な若い女性、石坂ミナに一八八五年に会った。彼女が一八八七年にキリスト教に入信してからは透谷のキリスト教に対する関心も急速に深まった。同年、ミナに対する感情が急に進んで一八八七年九月四日付けのミナ宛の手紙にこう書くまでになっている。

宛の手紙にこう書くまでになっている。

吾等のラブは情欲以外に縦り、心を愛し、望みを愛す、吾等は彼等情欲ラブよりも最ソット強きラブの力をもてり、吾等は今尙ワンボデイたらざるも、常にもはや一所にあるが如き思ひあり……<sup>(38)</sup>

文芸史家の伊藤整は、透谷のミナに対する愛は、巖本善治が説いていた新しいキリスト教的な女性観、一種の女性神聖視であったといっている。<sup>(39)</sup> 愛の虚偽について書いた一九五八年の有名な論文の中で伊藤は、恋愛観はキリスト教とほどきがたく絡まって日本に輸入された（愛の関係は根本的に神と人間との聖なる関係を反映したものである）、そしてキリスト教における神性の観念は、従って明治の日本にとって不自然であり、日本の伝統には異質なものであったといっている。<sup>(40)</sup> 透谷とミナの場合、一八八八年一月の結婚にもかかわらず、透谷の矛盾に

満ちた評論には愛の困難さと愛の理想が描かれていたことを考えると、伊藤の説にもうなずけるものがある。

透谷のこの論文は、明治二五年（一八九二年）二月に『女學雜誌』に二部にわたって掲載されたもので、愛、人間性、結婚、社会、神、理想、幻想などについて深く思索を巡らしている。すでに幾多の評論家が指摘してきたように、上下二部は矛盾しているように思われるが、この矛盾にこそ、統合するよりもむしろ飛躍を起こす新しい論法ばかりでなく、それまで蔑視されてきた「愛」というものを取り上げ、それに自己と自己あるいは自己と他者との間、また自己と非自己（社会）との間の仲立ちとしての新しい解釈学的な意味を与える斬新な論理が隠されているのである。「戀愛は人生の祕論なり、戀愛ありて後人世あり、戀愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ……<sup>(41)</sup>」という冒頭の文章は、木下尚江（一八六九〜一九三七）の言葉を借りれば「まさに大砲をぶちこまれた様なもので

あつた」らしく、当時の知識人を震撼させた。<sup>(42)</sup>

冒頭の数行で透谷は新しい考え方を確立した。そしてその考え方は、

戀愛は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる「己れ」を寫し出す明鏡なり。男女相愛して後始めて社界の眞相を知る、……獨り棲む中は社界の一分子なる要素全く成立せず、雙個相合して始めて社界の一分子となり、社界に對する己れをば明らかに見ることを得るなり。<sup>(43)</sup>

と後段になってさらに明確化されている。このように愛の解釈学を確立することにより「己れ」そして「社会」の解釈も確立される。恋愛關係を通して「己れ」を定義しないかぎり、媒介となるべき自意識が存在せず、「他者」と相對して初めて表に出る自己の認識の複雑さを寫しだす鏡になるものがない。そしてこのようにして、他者、

ひいては社会との関わりができあがるというわけである。

この論文の後半部は、前半部の論理を根底から崩そうとしている、あるいは「脱構築」しようとしているといえるかもしれない。透谷は、婚姻によって実世界と想世界とは解決不可能な衝突を起こしてしまうという。透谷の言うこの二つの世界について今ここで深く言及することは、私の論考の目的ではないので避けたいが、次の一行は、前半部の論点、さらに前半部で透谷が愛に与えた定義までをくつがえしているように思われる。

「抑も戀愛の始めは自らの意匠を愛するものにして、對手なる女性は假物なれば……」という一行がその脱構築の主要な要素を内包している。評論家の森山重雄は、「透谷の実世界否定、社界拒否の徹底性が導入されると、恋愛から『性』を捨象させ、『性』の現象形態を劣情・情欲としかみられなかった」といっている。<sup>(44)</sup>

ある意味では、これは負の論理、あるいは

は不在の論理から進展させた議論といえるだろう。透谷は肉欲と情熱をはっきり区別し、情熱を否定はしなかったが、情熱イコール恋愛というのでは現実のわなに陥り、想界は実界に侵略されてしまうという。しかし、愛を仮物あるいは幻想として抽象することによって、透谷は、現実を超えるところまで理想を広げると同時に、この幻想への飛躍の裏にある性愛すなわち愛を抑制している。また、「自らの意匠」という言葉を使って示唆しているように、その性愛は、内向的あるいはナルシズム的なものである。中村和子が、この段階で他者としての女性が姿を消し、恋愛の虚偽性があばかれていく<sup>(45)</sup>というところ、この点が非常に重要である。

「ああ不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辨となりてその嘲罵するところとなり……」という透谷の言葉のとおり、<sup>(46)</sup>感受性の強い詩人と理想化された女性との結婚の不可能性を嘆いて終わっている。太田

正紀は「サディスティックな」結婚といい、中村もここに表わされている否定的な女性観に対して同じように憤っている。<sup>(47)</sup>しかし、良きにしろ悪しきにしろ、愛、結婚、女性についての透谷の見地は、矛盾する両極端の間にとらわれたまま、それ以後の明治期の論争の枠を定義づけることになり、『太陽』を含め、この論争への参加意見はほとんどすべてその影響を受けている。

「厭世詩家と女性」の後まもなく書かれた評論数編では、透谷は上記に要約したように矛盾する恋愛観をさらに拮据している。おそらく彼自身の結婚が暗礁に乗り上げたために現実よりも理想を強調することになったのかもしれない。一八九三年八月付けのミナ宛の手紙に、

おんみに對して敬禮を缺けりといひ、眞の愛を持たずといひ、いろいろのこゝと前代稀聞の大叱言、さても夫たるはかほどに難きものとは今知れり。われいつのまに惡魔になりましたるにや、

この書にてしか見ゆめり……おんみ奈何ほどの愛ありて、斯くわれを責むるぞ。<sup>(48)</sup>

と透谷は書いている。一八九二年三月「厭世詩家と女性」の一月後には、幸田露伴（二八六七〜一九四七）の小説の中の「粹」と愛を対照させて、『女學雜誌』に透谷はこう書いている。

戀愛が盲目なればこそ痛苦もあり、悲哀もあるなれ、また非常の歡樂、希望、想像等もあるなれ……戀愛に溺れ惑ふ者を見て、粹は之を笑ふ<sup>(49)</sup>……。

黒古一夫が言うように、透谷は、江戸時代の遊廓文化で最も貴はれていた「粹」は、階級に封鎖された非日常の美意識であるために個人の自由の喪失と深くかかわっているのに対し、恋愛は迷であり、秩序の枠組を超え、個の尊厳と自由とを謳歌するといふ。<sup>(50)</sup>

同じころ書かれた評論で、江戸の風流を押し出していた硯友社の代表的な二人の作家、尾崎紅葉（一八六七〜一九〇三）と幸田露伴を批判して透谷は、性的な元祿文学につながるころのある好色と恋愛をこう比較している。

好色は人類の最下等の獸性を縱<sup>ほし</sup>にしたるもの、戀愛は、人類の靈生の美妙を發揚すべき者なることを、好色を寫す、即ち人類を自墮落の獸界に迫ふ者にして、眞<sup>まこと</sup>の戀愛を寫す、即ち人間をして美を備へ、靈を具するものとなすことを、好色の教導者となり通辯官となりつる文士は、即ち人類を驅つて下等動物とならしめ、且つ文學上に至妙至美なる戀愛を殘害するものなることを。<sup>(51)</sup>

好色と恋愛をこうまで対照させると、恋愛は、いかにもキリスト教の神聖な愛に影響を受けた、肉欲の欠如したプラトニック

な愛という方向へ押されている。野口武彦が「男と女の間の『純粹』な愛に宗教的な救済を求める修正プロテスタント風の愛」と、ラルフ・ウォルド・エマーソンの影響を透谷の恋愛概念に見いだすのも当然といえる。<sup>(52)</sup>

純粹性を追及すると、その年の『女學雜誌』六月号と八月号に発表された二編の評論が最も如実に示しているように、愛は、いやがうえにもどんどん理想化されていってしまう。「歌念佛」を讀みて」という前者の評論で透谷は次のように宣言する。

抑も戀愛は凡ての愛情の初めなり。親子の愛より朋友の愛に至<sup>いた</sup>まで、凡そ愛情の名を荷ふべき者にして戀愛の根基より起こらざるものはなし、進んで上天に達すべき淨愛までもこの戀愛と關聯すること多く……<sup>(53)</sup>

後者の「處女の純潔を論ず」という評論では次のようにいう。

夫れ高尚なる戀愛は、其源を無染無汚の純潔に置くなり。純潔<sup>チヤステイ</sup>より戀愛に進むときに至道に叶へる順序あり、然れども始めより純潔なきの戀愛は、飄漾として浪に浮かるゝ肉愛なり、何の價値なく、何の美觀なし。<sup>(54)</sup>

ここに引用した文章をみると、透谷がどれほどキリスト教の愛の概念に影響されていたかが明白にわかる。聖母マリアに象徴される処女性尊重主義は、ほとんどそのまま透谷の純潔性の理想化であり、神への愛すなわち淨愛（アガペー）と恋愛をつなぐ透谷の論は、宗教的な聖性と俗性とのつながりを暗示している。黒古によるとこれは、旧時代の半封建主義的な男女関係を煽り立てていた保守的な硯友社文学を批判するために透谷が使った思想的武器であった。そして透谷の恋愛論は時代の思想水準をはるかに超えていた。<sup>(55)</sup> 黒古は、透谷の思想が同時代のそれとは概念的にレベルが違っている

た証拠として、『女學雜誌』一八九二年九月に掲載された巖本善治による恋愛賛美の文章を引用している。

思ふに、戀愛は、其性質に於て最と美しきものなり、戀愛とは献身の情なり。卑しき戀愛は己れのためにすれども、其眞なるものは、他のためにす。己れを擧げて全然他に與へんとするは即ち戀愛の特質なり。<sup>(56)</sup>

黒古は、献身という言葉は、透谷が主張する立場と違い、男女を真に平等に見ない保守的な見解を示しているという。それに反し、関井光男は、明治の女性論の処女性尊重主義には、ダーウィンの進化論が流れているという。女性を純潔な佳人と醜穢な毒婦とに分ける二元論的なステレオタイプの出現に遺伝と性愛を結びつけている。<sup>(57)</sup>

こうして透谷について、またその恋愛観がどのように理解されどう受け入れられたかについて考えてきたが、このような概念

がどれほど当時の社会に浸透していたのかという疑問が当然わいて来る。当時の一般大衆は、透谷の主張のような進歩的で西歐的な恋愛観を持つようになったのか、あるいは旧時代の観念を捨て切れずにいたのだろうか。このような質問は、たとえまだ準備的な研究段階にあるにせよ、『太陽』のような大衆雑誌を検討すれば、答えが効果的に求められると思う。

『太陽』一八九五年〜九七年に見られる恋愛観

相原和邦が『太陽』の最初の五号（一八九五年には計一―号が刊行されている）を分析したところによると、創刊号は日清戦争の影を色濃く反映している（下関講和条約は一八九五年四月に締結されている）。『太陽』はいわば男の雑誌である……女のグラフィア、挿絵を多出する『文藝俱樂部』と好対照をなしているといえよう。」と相原は言う。<sup>(58)</sup>創刊期に掲載された小説に現われる女性像を検討すると、伝統的な女性観を引

きずっていることがわかる。饗庭篁村（一八五五〜一九二二）の「從軍人夫」という小説に描かれる母性、弱者としての女性像は典型的なものである。創刊後第一日目ぐらいまでの『太陽』に掲載された小説は、ほとんどこういう女性像を踏襲している。

創刊期の『太陽』に収録されている小説は、フェミニスト作家として有名な宮本百合子が「当時の教育ある婦人の妥協的常識の水準を示したものと評した三宅花園<sup>(59)</sup>（一八六八〜一九四三）や川上眉山（一八六九〜一九〇八）、幸田露伴、須藤南翠（一八五七〜一九二〇）などといった保守的な作家によって書かれた作品群であってみれば、このような結論が出るのも当然である。相原が唯一の例外として挙げているのは、第五巻に載った樋口一葉（一八七二〜九六）の『ゆく雲』である。この話の主人公のお縫は、一葉が数多く描いた当時の社会状況に虐げられた悲劇的なヒロインの一人である。明治の小説のテーマとして恋愛はまだ見られない。一八八九年に書かれた二葉亭四迷

（一八六四〜一九〇九）の『浮雲』だけは例外かもしれないが、恋情は主人公文三の心の中だけにあり、その対象であるお勢にはない。<sup>(60)</sup>なぜ恋愛がテーマにならなかったのか、その理由は、その年の九月『文藝俱樂部』に発表された一葉の『にぎりえ』にうかがわれる。この作品は、一文無し源七と酌婦お力の不可能な恋を扱っているが、お互いが置かれている物質的状况のためにこの恋は不可能なのである。この二人の恋が、両方ともに透谷が主張したような恋愛ではなく、盲目的な情に過ぎないということは、源七がお力を道連れに無理心中するという終わり方が明白に語っている。<sup>(61)</sup>

『太陽』第一巻第五号には泉鏡花（一八七三〜一九三九）の「愛と婚姻」という評論が載っており、結婚は果たして皆がいうほどのめでたいものだろうかと論じている。まず鏡花は、結婚は個人がしたいからするというよりも、社会的な圧力に負けてするものであるという。そして、完全なる愛は「無我」のまたの名である、しかし、実生

活における結婚ではそのような愛は不可能であるというので、実際の攻撃の対象は見合結婚であることがわかる。この評論からすると鏡花は、見合結婚だけしか理解していないように思われる。「人の未だ結婚せざるや、愛は自由なり。諺に曰く『戀に上下の隔なし』と、然り……」という鏡花は愛と結婚を対極に置いて比較している。愛には階級の上下がなく、結婚は階級に深く関わるものというのが鏡花の仮定である。「吾人は渠（一旦結婚したる婦人）を愛すること能はず、否愛すること能はざるにあらず、社會がこれを許さざるなり。愛することを得ざらしむるなり。要するに社會の婚姻は、愛を束縛して、壓制して、自由を剝奪せむがために造られたる、殘絶、酷絶の刑法なりとす。」とまで言っている。

「妻なく、夫なく、一般の男女は皆たゞ男女なりと假定せよ。愛に對する道德の罪人は那邊にか出來らむ、女子は情のためにその夫を毒殺するの要なきなり。男子は愛のために密通することを要せざるなり。」つ

まり、結婚さえしなければ男女は自由に愛することができると鏡花は論を進め、最後は、日本では古来から愛のために結婚するのではなく、社会のためにするもの、社会への義務を果たすためにするものであることを読者に念押しして締めくくっている。

この見解は、透谷が説く結婚観とは違う結婚の概念を対象にしたものであり、徳川社会の陳腐な義理と人情の葛藤を二番煎じしたような鏡花のこうした言説から、江戸時代の類型に近い現実がうかがわれる。

野口武彦は、この言説についてのコメントの中で、結婚に対する鏡花の攻撃と、彼の小説に登場する既婚婦人像とを結び付けている。人妻は、「ほとんど例外なく横暴な夫の不幸な犠牲者」として描かれ、対象的に毒婦的に描かれる芸者は、必ずといっていいほど鏡花の小説のヒロインであるという<sup>(82)</sup>。野口によると、鏡花の小説はブルジョワ道德の外に位置するもので、遊廓を背景に使っていることから、鏡花の考え方は、江戸時代の遊廓文化とそこに見られる愛の

概念を中心に置くもので、透谷以前のものと異なる。この記事の中で鏡花が、透谷と切り離せないほど深く関わりのある「恋愛」という言葉を一度も使っていないということ自体がそれを証明していると言ってもいいのではないかと思う。

『太陽』の第一巻の中で恋愛に関する記事として注目すべきと思われるのは、第八号に掲載されている水谷不倒（一八五八〜一九四三）の「戀愛小説」が一点あるのみである。水谷不倒というのは、小説家で江戸文学の著名な学者でもある水谷弓彦のペンネームである。代表作は、一八九六年に出版された『鑄刀』という作品で、人妻と書生との不義の恋の話である。小説のほかには江戸の芝居と文芸についての本を何冊か書いている。

水谷は恋愛小説をかなり広く定義しており、江戸時代のさまざまな作品も含めている。恋愛小説の美点は、日本古来の和歌の伝統が持つ優美の徳であるとしている。武勇を重んずる伝統的価値観は、同じく人心

に大きな影響を与えるが、それに対置させて、芸術的な高さを重んずる伝統的価値観を前面に押し出している。水谷は、無知な読者を啓蒙するというこれまでに使い古されてきた議論で恋愛小説を評している。

「恋愛」という言葉を意識的に使用しているものの、水谷の恋愛小説観は、鏡花と同じく、江戸時代の古い類型に根ざしているように思われる。この評論の前半に幸田露伴や山田美妙（一八六八〜一九一〇）などといった硯友社の作家を挙げていることもこのことを裏付けている。

一八九六年（第二巻）になって最初に恋愛を論じた主要な記事は、第五号の教育欄に載った元良勇次郎（一八五八〜一九二二）の「再婚と貞節との関係」である。元良は、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学で実験心理学の博士号を受け、東京帝国大学の心理学講師になった心理学者である。心理学と哲学の著書がある。

この長い論説は、主として寡婦が再婚すべきかどうかという問題を扱っている。

結婚は男女の愛情のみに拠るものであるか、妻の責任は夫の死後も舅姑を含む家・家族へ及ぶものであるか、根本的に愛情は移ろいやすいものであるのか、道義思想が愛情を制するという。

寡婦が再婚することに対する歴史的な偏見は、過去の慣習を引きずっているに過ぎず、今どきには適当でない。昔の「男尊女卑」はもともとは中国から来たものであつてやはり文化の進んだ現代には適当でない。元良は、男女相愛はまったく自然な感情であるが、結婚と家族制度は社会秩序のための必要から生まれたものであるという。したがって、人情は自然の産物であり、制度はこれを調和あるいは抑制するものである。最後に、寡婦は生理的、社会的見地から再婚できるべきであると元良はいう。

結婚は互いへの愛情に基づくものであるが、制度としての結婚は社会秩序の一環であり、その制約を受けるものであるという元良の立場ははっきりしている。彼の態度は、社会改革を目指し、愛を尊び、そして

肯定的である。しかし、「厭世詩家」の後半で、女は男に依存せざるを得ないことも女性の不幸につながっているという透谷を超越するものではない。元良の論は、明治啓蒙学者の使う合理的な言葉でまとめられ、透谷と違って他の国の（とくに西洋の）慣習を挙げて例証している。

第二巻第六号の文学欄には、大なるものを書けと恋愛小説家を訓戒する「戀愛は陳腐なり」という短文が載っており、「恋愛」という言葉がいかに普通の言葉であったかということを示している。同年の第一五号の家庭欄には、「女子の結婚に關する裏面の觀察」が見える。（イングリッシマン新聞所載）という怪しげな副題がついている。この記事の興味深い点は、英国における結婚を描いていると主張していることである。花嫁が夫を選ぶ自由を与えられている、愛情のためになせる結婚というものに重点を置いている。日本の場合と対照させているため、当時の日本の状況は、それとは正反対であることが暗示されている。この記事

は、結婚を何よりもまず契約であるときみなし、日本のカッパルに対する実際的な結婚相談という形のアドバイスを与えようというのが主な目的で書かれているようである。

結婚は、まず第一に男女の愛情の産物であるが、できるだけ親の承諾を得ることが望ましいと論じている。結婚は、夫に妻の生活程度を支え得るだけの収入があるという経済の基盤の上に成立するべきであるという。ここに挙げられている英国風の結婚の例から見ると作者は、恋愛結婚が必ずしもハッピーエンドにつながるとは限らず、英国の上流階級では一種の見合結婚が普通であることを示している。国内の世論を建て直そうという試みのために海外の例を挙げるといふ、古くからよく使われる策を用いた記事である。恋愛そのものは話題として取り上げられているわけではなく、恋愛を理想化しようとはしていない。

こうして見ていくと、『太陽』における恋愛は、ほとんど必ず結婚という文脈の中で語られ、透谷の「厭世詩家」と同じく結

婚に焦点を置いていて、いかにもそういうアプローチが最も実際的であると見なされているのがわかる。江戸時代の恋愛観は遊廓文化が中心となっていたが、キリスト教道徳の影響を濃く受けた透谷や巖本などの明治の改革者は、重点を家庭と家族に、そして夫婦間の愛に移そうとしたのである。

巖本善治は、一八九六年の『太陽』に愛を主題とした記事を二編載せている。最初は第二一号の家庭欄に所載の「男子、妻に對するの務め」である。男は外で働き、女は家庭を守るといふ相補的役割分担を肯定し、夫の妻に對する義務を強調する巖本の結婚観は、今の価値観からすると底の底から保守的である。しかし、その目的とするところは、家庭の重要性を強調することによって女性の地位を向上させようとするものである。したがって、その当時は、このような考え方は、非常に進歩的であったに違いない。巖本の主な目的は、妻に對する尊敬の念が欠けていると夫を懲戒し、妻は貞操を守ることを期待されるのに夫はそう

ではないという不公平な道徳観について、夫を批判することのようである。妻への情愛を隠すなど夫たちへ要求し、「熱愛」という言葉を使用しているなどの裏には、ロマンティックで理想化された恋愛観がうかがえる。

同じく一八九六年第二二号家庭欄掲載の「自由結婚の趣意」で巖本は、見合結婚に對する自由結婚について持たれている間違った考え方を矯正しようとしている。「自由結婚」と云へば西洋風の結婚なりと思ひ、隨意氣儘に縁事を結ぶとの様に考ふるは誤解と云ふべし。人に強ひられたるにあらず、財寶の奴隸となりたるにあらず、天運に束縛せられたるにあらずして、我が精神の自由なる選擇を経て約束したるを自由結婚と云ふ。即ち精神上のことにして肉欲俗界の事を言ふにはあらず。」という書き出しで始まっている。ここでも恋愛を、一方は好色で俗なもの、もう一方は精神的なものという二分的な見方をしているのがわかる。後者は明らかにキリスト教の恋愛観に

インスピレーションを受けたロマンティックな見方である。野口武彦は、日本キリスト教の世界観の外には、まだまだロマンティックな恋愛観などが存在する余地のない半封建的な実世界があったから、こうした対照的な見方は「愛とエロス」を分離する致命的な見方であったとしている。(63)

この意味で巖本は、自身の恋愛観のためにイデオロギー上の論争を展開しているのである。巖本の恋愛に関する記事の大半は、自身が編集者である『女學雜誌』に掲載されている。前にも述べたように、透谷と巖本の恋愛観には大きな相違点があり、そしてその一つは、小長井晃子の指摘するように、恋愛の普遍的かつ生理的なパラダイムを開発しようとする巖本の試み、歴史を超えようとするアプローチである。(64)

後年にこの見地がはつきり表面に現われるようになるのだが、『太陽』のこの記事で強調されている精神性は、人格を狭く宗派的に見るところから来ているので、もうこの時点でその後巖本の論がどう展開していくかを知る手が

かりになっている。

結婚についても少し伝統的な見方をしているのは、第二一号と第二二号の二回にわたって家庭欄に掲載された、法学士、藤井宇平による「婚姻論」である。結婚を、社会制度の一部、儒教に基づいて建設された社会における人間関係を合理的に秩序だてるものの一部として見ている。しかし藤井は、「美より起こる愛は未だ動物的情欲たるを免れず」といって、伴侶を決める標準として容貌の美がいかに不十分なものであるかを説いている。幸福な結婚の鍵として精神を強調し、知人友人同志の結婚、つまり「知合婚姻」を推している。続編でも藤井は、「婚姻をして人生及道德の高尙なる目的を達せしめんと欲せば、精神的愛情ならざる可らず」といっている。藤井は、新しい流行の精神的な愛情という概念を、古い道徳と折衷させているのである。一八九六年の『太陽』で恋愛についての重要なコメントは、第二二号の文学欄に載っている。「戀愛文字とシユムボシウム」

(プラトンの『シンボジウム』、文字は文学の誤植か)というこの記事に作者名は記されていない。この記事の重要な点は、*love* とギリシャ文字で書かれたエロスを強調しているところである。この記事は、恋愛小説の作家達にエロスを作品に戻すよう訴えている。「その用ふる所の愛なる語は元肉欲の愛を意味する *love* なりき、彼(プラトン)はこの愛情を臺として親子兄弟の愛を敘し、國家の愛を發揮し、神の愛を贊し、最高點として。觀念界に對する愛情を歌ひたり」(傍点は原文のまま)とプラトンの『シンボジウム』(作者は、学者にプラトンのこの著書を翻訳するように促している)の例を引用し、エロスが恋愛に必要な不可欠なものであることを示すことによって小説のテーマとしての恋愛の重要性を弁護している。エロスに重みを置くこの記事は、巖本を始めとする多くの『太陽』寄稿者が一般的に書いていた恋愛観とは大きく趣を異にしている。

翌一八九七年(第三卷)になってから初

めて載った恋愛についての記事で、注意を払うべきものは、第二号の文学欄の中の時文論評欄に載った、無名の編集者による非常に短い記事である。この記事は、「學海翁の戀愛論」と題され、おそらく恋愛という概念全体に疑問を投げかけるある特定の實在の人物に言及しているものと思われる。この老齡の学者が特に反対しているのは、神聖の恋愛という概念である。神聖の恋愛などあるものか、その証拠に誰もアバタに惚れないじゃないかという老人の言を、作者はいかにも嘲笑的に引用して批判している。疑わしければ先ずシラに問えと作者は促している。

この小さな記事の風刺は、「神聖なる戀愛」という言葉をめぐっている。明らかにキリスト教の恋愛観から来るこの「神聖なる」あるいは「聖なる」という言葉の、恋愛と結び付けた使い方は、ちょうどそのころから巖本といえはそれを連想するまでになつていった。その一番いい例は、一八九八年一月の『女學雜誌』第四七六号の

「雜感」欄に発表された「戀愛のまこと」という短い記事である。「戀愛にも高潔あり、聖氣あり、これを敬せずんばある可らず」、「肉の欲元惡しきにはあらず、肉其もこの爲には亦た自然の要求ならぬ」という巖本は、性的欲望を科学的・進化論的に見ることによって恋愛を神聖なものであると弁護しているのである。先に挙げた『太陽』の小記事が示すように、このような立場は広く誤解を受けていたのである。

一八九七年八月の『太陽』第一七号の時評欄に、著名な記者でドイツ哲学についてものを書いていた久津見蕨村（一八六〇—一九二五）による記事を雑誌『早稻田文學』から拾った「戀愛の計算」と題する短い風刺が載っている。文芸評論の編集者兼著者は、樗牛というペンネームがよく知られている高山林次郎（一八七一—一九〇二）である。明治時代の最も重要な評論家の一人に数えられる樗牛は、数多く評論や美学についての主要な論文を書いているが、中でも彼のニーチェ論は注目に値するもので

ある。この短い風刺記事で樗牛は蕨村の恋愛の計算式をそのまま引いている。

自然の躰欲+低級情緒||禽獸的戀愛  
高級情緒+好意的||神聖的戀愛  
他愛的+沒自我的||プラト一的戀愛  
禽獸的戀愛+神聖的戀愛||現實的戀愛  
戀愛||理想の戀愛

この恋愛をめぐる遊びは、ただ単に一見矛盾する計算式の並べ方にユーモアが潜んでいるからばかりでなく、恋愛の觀念、がいに新しいものであるか、インテリの間でさえ恋愛の觀念がどれほど理解されていなかったかを示して意味深い。

一八九八年から一九〇〇年までの『太陽』の戀愛觀

一八九八年（第四卷）の戀愛関連記事の中で唯一重要なのは、同年四月第八号の小

説欄に現われたものである。これは、悲しい感動的な小説を書いて大衆に人気のあった小説家、三宅青軒（一八六四—一九一四）による風刺的な短編である。この物語は、清浄潔白という青年と、お潔という若い女の話である。潔白とお潔は、啓蒙教育の模範とも言うべき二人で、潔白は神聖なる恋愛を歌う詩をものし、お潔はなんとか女学校へ通い言葉の終わりにやたらに「よ」を付けて話す。お潔は潔白に負けず神聖なる恋愛の信奉者で、これがこの話のテーマであることを話し手が読者に告げる。二人はやがて恋に落ちるが、従来の「不神聖な」婚姻の儀式はしないことに決め、かわりに「寫眞を取交し、互に相愛して終生變らぬといふ新體詩を取遣し、ここに全く神聖なる婚姻式は結ばれぬ。」しかし、結婚の目的は、不浄な肉体関係ではないので、二人は別居し、子など儲ける機会はない。このことを両親に聞かれて子など儲けるは神聖にあらずと豪語して、周りの者はかりでなく社会までも驚かす。彼らは互いの活

動写真を取り合い、それを見ながら「あの物を打見し姿の神聖なる、あのすらりと立しところの神聖なる、あの坐しところの神聖なる、あの歩行姿の神聖なる、神聖、神聖、誠に神聖と互ひに喜」んでいた。「あなたは、わたしを愛しますか、わたしは、あなたを愛します。」と電話をかけあつてはいたが、二人はそのうちに疎遠になり、潔白は芸者通いをしている様子である。話し手は、これほど神聖なものはない、これが彼らの愛で、読者が同意するなら試してみるとよいといって話は終わる。

実際のストーリーは、ふたこと目には神聖という言葉が出て、この要約よりはるかにユーモラスである。マンガ的效果のために大きく誇張していることは認めても、「神聖」な恋愛という新しく言いだされた概念の実情がほとんど理解されていなかったことがうかがわれる。

架空の男女関係に関してもっと保守的な扱いをしている例が、一八九九年二月発行の第五卷第四号に見られる。この話は、ど

ちらかという近代の新しいフィクションというより、江戸時代の人情本や滑稽本の流れに属する古いタイプのコメディである。題は「目度度心中」といい、作者は、四六歳になるまで筆をとらなかつた幸堂得知（二八四三—一九一三）である。作家として新しく足を踏み出した幸堂は、一躍人気作者となった。主に徳川風の滑稽なフィクションを得意としたが、ドラマにも手を付けている。この話は、ある隠居爺さんが若い芸者に愚かしくものぼせあがり、その芸者は爺さんに目を覚まさせるために、しかたなく偽の心中を計るという筋である。しかし、滑稽さにトゲはなく、二人の人物像は優しさをもって描かれている。恋愛の性質についてとくに考察しているところはないが、『太陽』はこのような話を毎号載せていて当時の読者の人気を呼んでいたことを考えると、当時の花柳界の現実と明治の大衆の期待や意識を洞察できるようである。

佐々浪子は、一八九九年第五卷第五号（三月）に「男女交際の事」と題される小

論を書いており、その中に恋愛に触れている部分がある。佐々は、国家の安寧は男女の親交にあり、その親交は、惚れ合っているという浅はかな交わりではなく、高尚な愛情の上に培われるべきであると述べている。封建的な男尊女卑を厳しく批判しているが、女尊男卑を唱えるわけではないという但し書きをつけている。この封建的な態度を持ち続けていくというのは国の恥辱であるという。佐々の主旨は直接明確にはなく、間接的に暗示されているのだが、明かに男女平等、互いに対する尊敬を礎にした男女関係を説いている。まとめると、佐々は一般的な議論をさそう問題提起をしたのである。

佐々の小論に対し、同年四月の第五卷第九号に橘長成が「男女交際の事を讀む」と題する厳しく否定的な反対論を書いている。橘が主に反対するのは、学校における男女参加の活動を増やし、男女学校間の交流を奨励し、社会も男女共同の活動を盛んにせよという佐々の提唱である。「今の時勢に

於て實行し得べからざる者、否實行するは容易なれど、是が爲に從來に數倍したる惡徳を醸し出し、吾が社會は百鬼夜行の狀態となるに至らむ。」と橘は書く。この程度はまだ序の口で、もし佐々の提案が受け入れられた場合、「日本の社會は是より花柳の巷と變じ……日本人は野蠻人の列に加」わるといふ。佐々の提案はキリスト教から得たものであるが、エホバの道德的理想は我が国にはあてはまらない。男女間の社会的交際は純潔であり得ず、プラトニック・ラブは邪道である。ラブ神聖を唱えて恥じないのは笑うべきである。

橘の大袈裟な反応の仕方をみると、明治の啓蒙家の恋愛・結婚、そして社会的交際に関する考え方が当時の多くの日本人にどれほど奇異に見えたのかがここでも浮き彫りにされている。佐々の性的革命というより改革の提案は、極めて温和なものである。『太陽』のような大衆雑誌は広範囲にわたる読者を対象にしなければならず、橘は極端な保守派の代表であったのかもしれない。

しかし、佐々の次の記事が示すように、一八九九年の社会的現実には、まだ根本から保守的であった。

佐々の二番目の記事は、第二一号の、先の記事と同様に家庭談叢欄に掲載されている。この記事は「夫婦の事」と題され、当時の夫婦を五種類に分類して論じており、先の記事の続編と見ることが出来る。五種類のタイプとは、東洋風の見合結婚で、愛情は必要条件ではないが当事者が相手を選ぶもの、西洋から輸入された、互いに愛し敬う自由結婚、やはり東洋風の結婚で、両親がすべてを決定するもの、互いに惚れあっているが正式の手続きをとらない同棲結婚、そして最後が芸者や下女を買い占めて妻とするものである。佐々による当時の現状の描写は、透谷や巖本などの明治の啓蒙家の説く恋愛の理想と実際の状態との間の大きなギャップを赤裸々に見せている。

一九〇〇年には、愛に関する数少ない記事やストーリーの中で恋愛を扱っているものは見当たらない。我々の考察の目的から

すれば、この年は不毛な年といえよう。

一九〇一年から一九〇五年まで  
の『太陽』に見られる恋愛

一九〇一年(第七卷)の『太陽』にはじめて恋愛が取り上げられているのは第四号である。武島羽衣(一八七二—一九六七)は、著名な歌人でもあり、また詩人でもあるのだが、教育者として文学者としても名高かった。「戀のをとめ」と題するこの武島の詩は、寓話風な詩物語で「恋」の乙女を描いており、その明治時代のロマンスについての洞察が深く面白いため英訳とともに全文を引用しておく。新体詩であるが七五調である。

春風かよひ草萌えて、  
Spring breezes blow, grasses bud,  
泉ながるゝ森のかげ、  
In the forest glade, beside a bub-  
bling spring,  
緑の髪をゆりかけて、

Tossing her black locks,  
『戀』のをとめはたたずもり。  
The maiden called "Love" was  
standing.

時にかたへを過ぎてゆへ、  
By the by, there passed beside her,  
いでたも清き武者一騎、  
A comely knight on horseback,  
をしぎ聲に呼びひるは、  
In a gallant voice he called,  
『をとめよ來ちやめむとめど』。

をとめ黙して首振りぬ、  
The maiden silently shook her head,  
彼不興げこ過ぎ去りぬ。  
Displeased, the knight took his  
leave.  
あゝけがれなき戀のやな、  
Ah unstained love,  
猛き武力も得ぬなりき。

No brave warrior would she  
have.  
次に來かゝる人かげは、  
Next to come by was,  
すがたやしき伶人よ。

A minstrel delicate of frame.  
涼しく黒きその瞳、  
His cool, black eyes,  
漆そそぎし如くなり。  
Shining like lacquer.

わんどの鳥を耻はひて、  
The birds blushed in their nests,  
嬌喉玉をまらばし、  
At his sweet-throated,  
聲をなやかたうひひへ、  
Singing, his voice eloquently calling,  
『をとめよ來ちやめむとめど』。  
をとめ黙して首振りぬ、  
"Come hither oh maiden to me."

The maiden silently shook her head,

彼不興<sup>かたふんぎやう</sup>ひこす<sup>かた</sup>あゆ<sup>あゆ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>。

Displeased, he took his leave.

あゝ神<sup>かみ</sup>頭<sup>かぶ</sup>の<sup>の</sup>戀<sup>こひ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>だ<sup>だ</sup>。

Ah sacred love,

妙<sup>たぎ</sup>なる<sup>なる</sup>樂<sup>がく</sup>も<sup>も</sup>得<sup>え</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>なり<sup>なり</sup>か<sup>か</sup>。

No rare music would she have.

次<sup>つぎ</sup>に見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>こ<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>鬢<sup>びんぱし</sup>髮<sup>は</sup>の<sup>の</sup>。

Next to be seen with flowing

sidelocks was,

書<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>よ<sup>よ</sup>田<sup>た</sup>の<sup>の</sup>儒<sup>にう</sup>者<sup>しや</sup>なり<sup>なり</sup>か<sup>か</sup>。

A Confucian scholar, hair whiter

than snow,

廣<sup>ひろ</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>額<sup>ひたか</sup>。

His brow so lofty,

百<sup>ひゃく</sup>十<sup>じゅう</sup>の<sup>の</sup>才<sup>さい</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>。

Countless talents must he possess.

sess.

眼<sup>がん</sup>光<sup>くわう</sup>人<sup>にん</sup>を<sup>を</sup>射<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>。

With bright, piercing eye,

ゆ<sup>ゆ</sup>の<sup>の</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>な<sup>な</sup>な<sup>な</sup>な<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>か<sup>か</sup>。

No soft words had he.

う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>舌<sup>した</sup>の<sup>の</sup>聲<sup>こゑ</sup>の<sup>の</sup>響<sup>ひび</sup>き<sup>き</sup>だ<sup>だ</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>。

Solemn of mien, stern of voice.

『や<sup>や</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>來<sup>き</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>ひ<sup>ひ</sup>ふ<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>』。

“Come hither oh maiden to me.”

さ<sup>さ</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>の<sup>の</sup>黙<sup>もく</sup>して<sup>して</sup>首<sup>くび</sup>振<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。

The maiden silently shook her head,

彼不興<sup>かたふんぎやう</sup>ひこ<sup>こ</sup>す<sup>す</sup>あ<sup>あ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>。

Displeased, he took his leave.

あ<sup>あ</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>戀<sup>こひ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>だ<sup>だ</sup>。

Ah piteous love,

深<sup>ふか</sup>き<sup>き</sup>學<sup>まな</sup>問<sup>もん</sup>も<sup>も</sup>得<sup>え</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>なり<sup>なり</sup>か<sup>か</sup>。

No deep learning would she have.

次<sup>つぎ</sup>に見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>たる<sup>たる</sup>人<sup>ひと</sup>こそ<sup>こそ</sup>な<sup>な</sup>。

The next to be seen was,

世<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>官<sup>くわん</sup>人<sup>にん</sup>。

A courtier exalted in the world,

玉<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>冠<sup>かんむり</sup>の<sup>の</sup>。

A crown bedecked with jewel,

あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>尊<sup>たむがひ</sup>の<sup>の</sup>玉<sup>たま</sup>。

So his nobility did glitter.

前<sup>まへ</sup>驅<sup>か</sup>引<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>や<sup>や</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>車<sup>くるま</sup>。

His horse-drawn carriage,

た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>添<sup>そ</sup>ひ<sup>ひ</sup>こ<sup>こ</sup>す<sup>す</sup>侍<sup>さむらい</sup>の<sup>の</sup>。

Guarded by brave samurai,

い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>だ<sup>だ</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>じ<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>。

Beckoning to her, he called,

『や<sup>や</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>來<sup>き</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>ひ<sup>ひ</sup>ふ<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>』。

“Come hither oh maiden to me.”

さ<sup>さ</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>の<sup>の</sup>黙<sup>もく</sup>して<sup>して</sup>首<sup>くび</sup>振<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。

The maiden silently shook her head,

彼不興<sup>かたふんぎやう</sup>ひこ<sup>こ</sup>す<sup>す</sup>あ<sup>あ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>。

Displeased, he took his leave.

あ<sup>あ</sup>ゝ<sup>ゝ</sup>尊<sup>たむがひ</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>戀<sup>こひ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>だ<sup>だ</sup>。

Oh noble love,

高<sup>たか</sup>き<sup>き</sup>位<sup>くらゐ</sup>も<sup>も</sup>得<sup>え</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>なり<sup>なり</sup>か<sup>か</sup>。

No great rank would she have.

やつその後にあゆみこし

Now then, after, there came on foot,

陶翁あやむく家師か

A merchant as rich as Croesus,

胸にかけたる黄金の

On his chest laden with gold,

革囊重く見えてはる。

A large purse could be seen.

しるなびかなは打たやい

Silver and gold all jumbled,

田舎を賣のひし振の

Offering a handful of treasure,

聲いへひちやうくそやい

Calling in his gilded voice,

『さよる女來ちをふらふふ』。

“Come hither oh maiden to me.”

さよる静し首振のさ

The maiden silently shook her head,

彼不興にちやあゆみ。

Displeased, he took his leave.

あはれけたかき戀こそは

Alas, lofty love,

巨萬の言を得ぬなら

No vast wealth would she have.

春風かざり花吹雪。

Spring breezes so fragrant, flowers

blossoming.

哀な琴を弾かゆる。

Accompanied by the lute of the

bubbling spring.

うひつなりの森かむひ

Unawares in the wooded glade,

『戀』の男はどらむ。

There came a man called

“Love”.

なやみ溢るゝ雙の眼

His eyes overflowing with emotion,

あやふじばるゝ心のさ

Sincerity overspilling his heart,

彼もなやみあふらうたけ

He gently whispered,

『さよる女來ちをふらふふ』。

“Come hither oh maiden to me.”

さよるはあみなりなづ。

The maiden smiling, nodded.

胸と胸とを寄合らる。

Breast embraced breast.

あゝ誠める戀こそは

Ah true love,

誠の戀を得たりけれ。

Only true love would she have.

武島の詩は、中世的であるが、どこか本的な特徴を持つ物語詩という形で恋愛を寓話化している。ここにみられる恋愛のロマンティックな理想化は、島崎藤村（一八七二〜一九四三）の新体詩の処女詩集『若菜集』（一八九七）の語り口に通ずるものがあるが、武島が故意にヨーロッパ風の語りの構造を選んでゐる点で異なつてゐる。武島の恋愛詩は、明らかにヨーロッパ型の

恋愛を連想させ、藤村の詩よりエキゾティックである。

同年八月発行の第九号にも恋愛詩が登場している。「戀ひ草」というこの詩は、自由詩人で教育家としても知られ、一八九六年に武島と合同詩集を出版している塩井兩江（一八六九—一九一三）の作である。二人とも古風で優美なスタイルを信奉する詩の運動に活躍していた。武島の詩と同様に七五調で書かれたこの詩を英訳付きで引用しておこう。

いとしと、君を 思へるは、

What I love about you,

み姿ならず、み顔ならず。

Is not your figure, not your face.

にほふや君が み顔にも

Though your face the face of one so

fragrant,

ゆかしき色は ふかけれど、

Is so lovely in colour,

け高き君が み姿も

Though your figure the figure of  
one so noble,

天つ姫とし 見ゆれども。

Looks like a heavenly princess,

いとしと、我れが 思へるは、

What I love about you,

君が心ぞ、み心ぞ。

Is your heart! Your heart!

清けき君が み心に、

Your heart the heart of one so pure,

天の誠を 我れ知りて。

I know to be the truth of heaven.

やさしき君が み心に、

Your heart the heart of one so gentle,

まことの情を 我れ知りて。

I know to be true in feeling.

ここでも真実の恋、心の恋という西洋のロマンティックな修辭法が全編に浸透している。この非常によく似た二編の詩が同一

の雑誌に前後して出版されたということは、真実の愛という詩の概念が、その当時、いかに深く根を下ろすに至ったかを証明しているといえないだろうか。

『太陽』の文芸評論欄に恋愛について短いコメントを次々に書いているのは、その編集を担当していた高山樗牛である。これらのコメントを考察する前に、一九〇一年『太陽』に載った樗牛の哲学的な記事について少し触れておきたい。著名な思想家 H・D・ハルトゥーニアンによると、樗牛の作品の中でずば抜けて重要なのは、樗牛が受け持っていた欄について後で考察するが、それとはほぼ同時期の一九〇一年八月（第九号）の『太陽』に掲載された「美的生活を論ず」とあるという。このエッセイの中で樗牛は、美的生活は人間の他のどの活動より高尚であるという信念を宣言している。このエッセイは個人主義を、公的空間より私的空間を謳歌しており、日本の思想史がそれ以後たどった道に大きな影響を与えたとハルトゥーニアンは言う。<sup>(65)</sup>

「美的生活を論ず」の中で恋愛に触れている唯一の部分には、「美的生活の事例」と題される第六章(部)である。「戀愛は美的生活の最も美はしきものの一乎。是の憂患に充てる人生に於て、相愛し相慕へる少年少女が、薔薇花かほる籬の蔭、月の光あかき磯のほとりに、手を携へて互に戀情を語り合ふ時、その樂みや如何ならむ。……人を羨殺するに足るものならずや。……百年の命を以て一日の情に殉し……道學先生の

見地よりすれば、戀愛の如きは青春の迷ひに過ぎざらむ、然れども是の如き迷ひは醒めたるものにとりて永遠の悔恨に非るべき乎。」と樗牛は書いている。樗牛は、戀愛の向こう見ずな歡喜を詩的な表現で賛美している。このエッセイの他の部分で樗牛は、本能の優位を強調するのに力を注いでおり、個人に恋愛の自由をもたらす性欲は樗牛の思想に包み込まれている。しかし、これから樗牛編集の欄に載っているコメントを調べると、樗牛は因習打破主義者としか呼ぶようがない。

一九〇一年一〇月の第七卷一二号所載の「所謂戀愛文學」では、樗牛は、当時の少年達に与える影響を考へて恋愛に関する文學を酷評している。「ただ是の種の書冊が當代少年の間に如何の影響を及ぼしつゝあるかを想へば、覺えず寒心せずばあらざる也。」と厳しく評している。おそらく戀愛をテーマとする文學と称してする作品で、実はそうではないものを叩いているのではないかと思われる。

樗牛の担当するコラムに続いて載っている「吾に戀せる女ありとせよ」は、もう少しわかりやすくなっている。ある青年雑誌が、自分に恋をしている女があると仮定し、その女の母に娘を娶ってくれと頼まれたらどうすべきか、その答を公募したことを取り上げ、読者は恐らく失笑するだろうといい、このようなものを文學と呼べるのなら、国は滅びるだろうとまでいっている。恐らく、この話で樗牛の激怒を買うのは、現実性の完全な欠如ではないだろうか。そしてもしこの推測が正しければ、ロマンス

に関して、実情が文學的レトリックとかけ離れていたことのもう一つの証拠になろう。次号の『太陽』(第七卷第一四号)は、一九〇一年一月発行で、樗牛は再度戀愛について氣炎を吐いている。女は化粧しないで自然のままの方が美しいと思うという、化粧について批判的なコメントの中で、樗牛が使っているイメージが聖書からそのまま取ったものであることに留意しておこう。そのコメントのすぐ後に、「性慾」という

大胆な題の樗牛による短い項目がある。この文芸時評欄には性慾についていくつかの小項目が並んで載っており、これはその最初のものである。まず樗牛は、性慾という名称ほど美しいものはないという。「性慾無きところに人生幾何の價値ありや、吾等まことにそれを疑ふ也。彼等に詩ありや、愛ありや、將美ありや。」と論を進めている。恋愛に関する樗牛の見解は明確である。愛、あるいは戀愛と性をはっきりと連結させているところは、透谷にも巖本にも見られないことであった。この点で樗牛ははる

かに急進的だといえる。『太陽』に稿を寄せている主要な著者の誰にも、樗牛ほどオーソドックスな儒教的道徳観に対して明らかな挑戦を行なっているものはいない。

このテーマについての樗牛による白熱の論考が出た後、恋愛についての記事は一九〇三年まで見当たらない。一九〇三年四月発行の第九巻第五号に、『太陽』の文芸時評欄を樗牛から受け継いだ宗教学者の姉崎正治（一八七三〜一九四九）が「久遠の女性（女性に對する佛教と基督教）」という長い論文を書いている。姉崎の主な意図は、恋愛ではなく、道徳の考察であった。しかし、恋愛に触れる興味深い指摘がいくつもある。キリスト教によると、夫婦の間の愛は神聖であるが、妻の愛は夫のためだけに限られている。一方、聖母マリアは、伝説では夫を持っていたとしても、信仰の理想としては「永久の処女」で、その愛は万人に及ぶ、そしてその愛は、私欲や肉欲を離れた清浄の愛である。このような理想像の帰結として、仏教でもキリスト教でも、恋

人としてあるいは愛の対象としての女性は、あまり喜ばしくない立場に置かれていると  
いつている。

一九〇三年に恋愛を扱っているもの  
を挙げるに足るのは、同年七月の第一〇号  
所載の、ロマン派作家の旗手、国木田独歩  
（二八七〜一九〇八）による「夫婦」とい  
う題の短編小説である。「夫婦」は、ロマ  
ンティックな情熱はいかにはかなく消えて、  
なにか他のもの、情熱は薄くとも長続きす  
るものに変わっていくことを描いている。

夫はこう言う。「戀して直ぐ結婚してす  
ら戀其物は持續しないのが常なるを、何で七  
年前の戀を戀して結婚した我等が、結婚後  
に於て戀せし昔を今に爲ることが出来る。  
……青春の夢と共にさめゆくが自然の成  
行ならば、戀の又燃たる火の其と同じく必  
ず消え失する時があるであらう。これ悲む  
べきことに相違ない、然し人性は矢張りさう  
いふ風に出來て居るならば致方もないので  
ある。」読者は、このせりふに独歩自身の  
経験を重ねてみたいという誘惑にかられて

も無理はないだろう。独歩自身、苦い離婚  
の二年後、一八九八年に再婚しているから  
である。もうこの時すでに作家として、そ  
して戦争記者としての名声を勝ち取っていた  
が、恋愛になると運が悪かったようである。  
一九〇四年は日本が日露戦争に突入した  
年で、当然ながらこの年の『太陽』にはテ  
ーマとしての恋愛は影が薄かった。恋愛が  
わずかに触れられているのは、当世の女学  
生は恋愛小説に悪影響を受けているという  
苦情に對する反論だけである。この短い反  
論は、同年七月の第一〇号の文芸時評欄に  
掲載されている。この欄の編者は、それな  
らば夫婦連れの散歩を禁止せよ、いっそ結  
婚自体を禁止せよと嘲笑的に反論している。  
あらゆる不道徳はこれで解決できるという  
わけである。戦争が激しくなるにつれ、軽  
薄で浅はかな記事は検閲して排斥すべしと  
いう圧力が増していたことを示しているよ  
うである。

一八九七年から一九〇四年までの『女學雜誌』に見られる恋愛観

一八八八年から一八九八年までの『女學雜誌』に見られる恋愛観については、透谷と巖本の恋愛観についての考察の中で触れたが、ここでこれ以後から一九〇四年の廃刊までの『女學雜誌』を詳しく検討し、『太陽』が打ち出していた恋愛観と『女學雜誌』のそれとを比較することによって両者に相違があるかどうかを見て当時の日本がどのように恋愛の概念を受け入れたのかについての理解を深めたい。

『女學雜誌』が恋愛についての論争に大きく寄与したのは、主に生物学的およびイデオロギー的側面からの見方、つまり、セクシュアリティと性欲についての実際的な考え方と、男女は結婚において平等の性的パートナーであるというキリスト教からインスピレーションを受けた男女観を恋愛観に吸収させたことである、というのが小長井

晃子などの研究者の見方であるので、この生物学的な論脈を明治時代の源にたどってみるのも意義があるだろう。

鈴木貞美は、夫婦間の愛に性的快楽は重要な部分を占めるという考え方や、セクシュアリティと道徳とのつながり、純潔尊重主義などを盛り込んだプロテスタント的なセクシュアリティ観の広がりには、ジェームズ・アストン (James Aston) のセクソロジー書を一八七五年に千葉茂が訳した二巻の『造化機論』の流行が大きく寄与したという。関井光男もよく似た論を展開している。鈴木は、このようなプロテスタントイズムの道徳は、儒教の伝統の中でも並行して福沢諭吉(一八三四〜一九〇一)ら文明開化主義の知識人が、夫婦の絆を重んじ、廃娼を提唱したことも挙げている。このような改革論的な立場は、日本を改革するという福沢の政治目的の一環として開発されたものであった。<sup>(65)</sup>

日本のロマン主義運動の研究者、笹淵友一は、『女學雜誌』と、それから派生して

ついにその後を継いだ『文學界』以前には日本には恋愛という言葉と観念に対する真の理解はなかったと言っている。笹淵は、『女學雜誌』の前には、「恋愛」の文学的な表現といえは、ほとんどの場合、異性に対するほのかな憧憬のぼやけた表現でしかなく、「プラトニック・ラブ」という観念となるとさらにぼやけて、定義づけできないような意味はほとんどなかったという。<sup>(67)</sup> その証明として、笹淵は、当時の人気作家、田山花袋(一八七一〜一九三〇)の作品二作から引用している。一つは花袋の『林の少女』から、「世の中にわれの戀ほど、美しく神聖なる戀はあらざりしなるべし。」<sup>(68)</sup> してもう一つは、『わかれ』から、「戀は神聖なものである。互ひに相愛し相慕ふことさへ出来れば、最早圓滿なる成就の境に達したのである。」

笹淵は、花袋のような作家とは対照的に、透谷と巖本のような論客は、彼らのキリスト教の信仰ゆえに、そして男女の精神的な関係への熱望ゆえにかえて官能の欲求を

強く自覚していたという。彼らは花袋よりもはるかに恋愛の現実をしっかりと把握していたばかりでなく、その結果彼らの苦しみも深かった。<sup>(69)</sup>

雑誌以外の資料に笹淵の論点を裏付けるものがある。たとえば、硯友社の作家の中でも指導的立場にあった尾崎紅葉は、一八九七年に恋愛についてさまざまな人々と話し合ったことが記録されている。紅葉の古くからの友人であった千歳米坂が、「戀愛は肉交（にくかう）の外ならず」と論じたところ、紅葉は、「精神的（せいしんてき）の愛（あい）がなくツチャ、戀愛（れんあい）は成立（た）たない」と答えたという。<sup>(70)</sup>

『女學雜誌』の記事に特定の証拠を探れば、笹淵他の言説の正当性が検証できる。しかし、笹淵の論は、主に透谷の「厭世詩家」が出版される前の時期に関することに留意しておきたい。透谷の後、『女學雜誌』は新しい恋愛観を追究するようになったという笹淵の説こそ、検証した後になんかそのような恋愛観を支持していた『太陽』と比較してみる必要があるだろう。したがってここ

では、透谷の恋愛観が『女學雜誌』で巖本やその賛同者たちによって支持されたのか、あるいはさらに発展させていったのかどうか、そしてどの程度それが『太陽』で起こっていたことと並行していたのかということに焦点を当てたい。『女學雜誌』を検討するに当たって、小長井晃子の案内に従い、恋愛に関連しているとして選抜された記事、詩、翻訳だけに範囲を限った。そして、古いものにはもうすでに触れたので、時期を一八九七年から一九〇三年までに絞った。<sup>(71)</sup>

一八八五年七月から一九〇四年二月までの間に五二六号が刊行されている。一年間の発行号数は、少ないもので一八八五年の一一号、多いもので一八九二年の五三号があり、特定していない。ここで検討の対象とした時期の発行号数は、それ以前のピークから落ち着いて来たところで、一八九七年には二四号、一八九九年には二二号、一九〇〇年には九号、一九〇一年には四号、一九〇二年には発行されず、一九〇三年から四年にかけて一一号となっている。発行号

数の激しい変動の理由の一つに、一八九二年にこの雑誌を「赤」と「白」に表紙の色を分け、それぞれ別の編集者が担当して発行したことから、『女學生』などといった雑誌が派生して独立していったことが挙げられる。<sup>(72)</sup>伊藤整は、『女學雜誌』運営の最初の数年間は、『國民の友』などという雑誌は一回に一万部を発行していたのに比べて、一回の発行部数が少ないときは千部から二千部しかなく、明らかにうまく行っていなかったと見ている。<sup>(73)</sup>もちろん、『太陽』の莫大な発行部数と比べると、『女學雜誌』は、少数のインテリ読者に読まれるだけの単なる同人誌に過ぎなかった。各号のページ数もしばしば四分の一に満たないこともあり、『太陽』には比べものにならないかった。

小長井は、この時期に発行された九四号の中から三四項目を恋愛関係のものとして挙げており、それをここで研究の対象とした。先に挙げた巖本による「戀愛のまこと」の前に重要なものとして挙げておきた

いのは、一八九七年八月第四四八号の「女學」欄に掲載されている、評論家で翻訳者でもある桜井鷗村（二八七二〜一九二九）の「貞婦を論ず」である。鷗村は、愛情の満足を通して女性性は貞婦になるといふ。愛が信頼を生み、これが女性の愛情を育むと鷗村は続ける。小長井はこの記事を、女性の貞淑を強調し、男女で差のある二重の規範を押し出すことによって女性のセクシュアリティを抑圧する保守的な觀念からの言説であるとして見ている。<sup>(4)</sup> この見地は、巖本が強調するところの、男女は平等の権利を持つが、性質が異なるので異なった性的役割を担うという意見のバリエーションの一つと見ることも出来そうである。

一八九八年の『女學雜誌』に恋愛について重要な論考を寄せているのは三輪花影（二八七二〜一九四六）で、三月の第四六二号と四月の第四六四号に上下二回に分けて「情死の哀を想ふ」を載せている。キリスト教の立場から情死という慣習と、さらにそのような事態へ落ち込まざるを得なくする

るような状況を攻撃している。キリスト教的視点は、巻頭で明らかにされている。「愛は天地の眞、終極の善、最高の美なり。眞善美の一致融合する處、即ち終極の理想なり。」といい、その後、次のように言っている。若者達に恋の危険を警告している。

「青年の戀は常に理想的（寧ろ空想的）なり、彼等は互に其情人の周圍にハロを作て完全ならしめ、互に自己の理想を愛して夢幻裡に遊べり。彼等は互に愛するといはんよりは、寧ろ戀を戀すといはん方當れるならん。」こういつてから八行後に花影は、北村透谷の死の原因について、世人が言うように、「厭世詩家」に述べられている現実と理想の間に生ずる破裂だけが唯一の原因ではなく、一因でしかないのではないかという。そして、逆境にあれば愛は多くの障害に遭つて悲惨なことになるかねないことを警告している。花影の論は非常に洗練されたものであることは自明で、若者の盲目的な愛の危険性についての花影の言説は、図つてか偶然かはわからないが、哲学的対

話論『ファイドン』の中でソクラテスの口を借りてプラトンが描写する愛によく似ている。

二部に分れたうちの「上」に当たるこの小論で、花影は肉欲について次のように言っている。

少なくとも現世の戀は、肉感を離る事なしと思ふ。肉感を混するが故に戀は神聖にあらずと思は誤れり、是は豈ひとり戀のみならんや、若し是を以て聖からずといはゞ現世何者か又聖からんや。特に彼等理想論者が尊重する結婚は神聖ならざるのみならず、戀を墮落せしむる者といはざる可らず、我は戀の神聖なる所以を、其至誠なるにありと信ず。互に自己を忘れて其情人を思ひ、一身を捧げて省みざる實情にありと信ず。即ち我先に云ひし所の、人性中の神性の發現する所にありと思ふ者なり。利害をのみ打算する現世にありて、斯る心情は眞に尊むべき者にあら

ざるか。

続けて花影は愛の困難について例を挙げ  
て論じている。一八九七年の『太陽』に神  
聖の愛を風刺したさまざまな話が載ってお  
り、花影の小論が発表された数か月後に三  
宅青軒（一八六四—一九一四）の風刺小説  
が発表されていることを考えると、花影の  
論がどれほど複雑でニュアンスに富んでい  
るかがわかる。

一八九八年四月四六四号にはこの小論の  
「下」が載っており、花影は、さらに愛は  
外から生まれるものというよりも内から生  
まれるものと見るキリスト教的な愛の在り  
方を発展させている。

愛は元始の無意識より最高の無意識に  
貫通す、愛の中に法律なしといふは即  
ち是故なり。或は基督我に在て活るな  
りといひ、基督の愛我を勵せりといひ、  
或は彼に依りて生命を得しむといふ、  
是皆愛の化身なる人の子を通じて、始

て神を識りて、永遠の生命に入るを云  
なり。

内なる愛を強調した花影の結論はバラド  
ックスめいている。社会の通念に圧迫され  
て心中するしかないと思いつめる恋人  
たちに同情を寄せるあまり、「嗚呼尊き哉  
情死や」などという表現を使って、あたか  
も情死を称賛しているかのようによめるほ  
どである。そして最後に、心変わりするの  
は特に遊女だからではないから、愛のため  
に情死する遊女を責めるなど戒めている。  
ここで花影は、マグダラのマリアの名を挙  
げている。中世にマリアは悔悟した売春婦  
であったと信じられていたことを指してい  
ると思われる。愛についてのキリスト教的  
視点が圧倒的に強調されているのは、多彩  
な寄稿者が多岐にわたる話題について書い  
ているために妥協こそされているが、やは  
り『女學雜誌』は伝導が目的であったこと  
が思い出される。

『女學雜誌』がキリスト教にインスピレー

ションを受けた「神聖」な恋愛を受け入れ  
ていたことを、より広い読者層を対象とし  
た雑誌である『太陽』がそのページのあち  
こちで笑いにしていたことは、一八九九  
年六月の『女學雜誌』四九〇号に現われた  
記事によって確認できる。「白百合」とだ  
け記した無名の寄稿者が亡き友をしのんだ  
寄書で、「戀愛の神聖なるは今更にことこ  
としく言ひたつべきにはあらず」と書いて  
いる。

一九〇〇年二月五〇五号では、巖本善治  
が「隨感」欄に、恋愛について短い二項目  
を載せている。最初の項目は、「戀の淺瀨」  
と題するもので、恋の淺瀨は速く通り越せ、  
淺瀨は身を投じるより遠くから見方が美  
しい、身を投じるなら深淵へという。巖本  
の情熱的な恋の勧めは、その次の「慈愛聖  
戀」にも続いている。

この記事で巖本は、無償の愛を「悉とく  
與へて毫末も惜しまず、而して生命ある間  
だに之を覺られずとも尙ほ恨む所なく……  
戀を寄せて、他の知らざるに熱情の誠をの

こし、死するも尙ほ恨みずとする聖なる愛は爲しがたきものか」と言つて親が子に与える無償の愛と恋愛を比べている。そして「よし難くとも人は努めずんばある可らず。」と結んでいる。西洋でも日本と同じく、無償の愛が最も崇高な恋愛としてみなされることが多いが、巖本の二記事はこれを確認しているようである。

同月発行の次号の『女學雜誌』（第五〇六号）には無記名（女性と思われる）の記事が載っており、「神聖なる戀愛」または、この雑誌によく使われている「聖愛」を少し変えた「聖戀」という概念に奥行きを加えている。この短い記事は、「兄妹姉姉の愛」と題されている。先ず、賢い母をもつ男性は、女性を蔑視することはない。女性は、男性に一般の女性に対する肯定的な態度を育む責任がある。もし姉が弟を愛すれば、彼は女性に対してもつべき正しい愛を知る。男性が愛情に溢れた家族をもたなければ、女性に対して「濁れる欲情」を抱く。家族生活から生まれる愛のある関係は、

「實に理想的の聖戀」の正しいモデルとなるというのがその主旨である。

家族、それも著者が暗示する愛に溢れるキリスト者の家族こそ、男女間の正しい関係を豊かにする理想的な環境であるという。

このキリスト教の観点は、従来の儒教の家族像とはいくつかの相違点があるといつても、家族が社会のモデルとなることを強調している点などではそれほどかけ離れているわけではない。この記事は、恋愛を、社会関係の一部とし、社会の外あるいは社会一般に反抗するものではないと認める視野の中に「聖戀」という観念を置いている。この考え方は透谷の論が端緒になっているとはいへ、情熱を従順化して家族というイデオロギーに変換するという論理では、恋愛の革命的性質が見事に消されてしまっている。これは透谷が意図した結末ではないだろう。

巖本が提唱した明らかに夫婦愛的な愛のモデルは、一九〇〇年三月の『女學雜誌』五〇七号に掲載された「大丈夫の忍ぶ戀」

に他よりも生き生きと描かれている。恋愛は、等分の猛烈な欲望と高潔な献心から成り立っている、男性にとつて恋愛は単なる獲物を追つて獲得することではなく、反対に苦しみを分かち、人生の困難を共に忍ぶものであると巖本は言う。男性に比べて女性の方がこれを簡単に悟ることができるが、男性は、蛮勇と快男子の意気地とを、そして愛と征服とを取り違えるな、と巖本は呼びかけている。

青柳有美（一八七三〜一九四五）は、『女學雜誌』に一九〇三年から関与し、第五二四号（一九〇三年一月）からは編集長となった。本名ばかりでなく、さまざまな筆名を使って有美はこの雑誌に非常に数多くの記事を書いている。彼は、男女は平等であるが性質は異なるというキリスト教からインスピレーションをうけた巖本の立場を受け継いだ。有美は特に恋愛の概念に興味を持ち、これについて有名な論文を書いた。有美が、家庭と男女間の生理学的差異を信条としていたことは、『女學雜誌』への頁

献が多くなるにつれてますます明白になっ

ていつている。一九〇〇年二月(第五〇六

号)の「美術家と戀愛」の中で、有美は男  
女の差について次のように論じている。

「……男もすなる美術は、よく女人の心を  
虜にするものなり。夫れ、男子は惑み女子  
は崇む、これ、男子の戀と女子の戀との  
著しく相異るところにして、其特質の神

髓なり。」という有美の視点は、生物学的

決定論の一種に近く、どちらかというところ、  
この雑誌のこれまでの寄稿者たちの視点よ  
りもさらに保守的である。

とはいっても、有美が女性の権利の基本  
的な主張者であることは、次の二つの作品  
によく表われている。最初のは、一九〇〇  
年三月(第五〇八号)に所載の「戀愛教科  
書」と題されたものである。有美の機知に  
富んだ文体は、どちらも生命の根本的なも  
のという意味で恋愛を食物と比べている。  
彼は、高等学校生のための戀愛の教科書が  
ないことを嘆いている。シェークスピア劇  
はすべて「戀の物語」であることに注目し、

ミルトンの『失樂園』でさえ恋愛の趣味を  
加えていると言っている。恋愛について男  
女を教育する適切な教科書に対する日本の  
教育家の怠慢を手厳しく批判した後、この  
目的に適するものとして有美は淨瑠璃の義  
太夫本を挙げている。中でも近松と竹田出  
雲(一六九一―一七五六)などの諸大家を  
最も適切として名指している。

時折有美の機知は辛辣であるが、真面目  
な論議に筆が向くとき、その論は見事であ  
る。第二の記事は、女性の権利を主張した  
もので、一九〇一年三月五二二号から五一  
四号まで上中下三部に分けて「婦人の修養  
に就て」という題で発表されている。有美  
は、女性が若いうちに結婚することに反対  
している。特に一五歳の少女が結婚を考え  
るのはあまりにも若すぎるという。それよ  
り女性は、教育を完了するために時間を費  
やすべきだという。小長井が指摘するよう  
に、このような観点は、当時の見識および  
実情に真っ向から反対するものであった。<sup>(76)</sup>  
有美は、議論を正当化する根拠を女性の生

理に置いていた。つまり女性は結婚して育  
児に入る前に思想的にも肉体的にも成熟す  
る必要があるというのである。

上記に挙げたような記事を『太陽』のも  
のと対照してみると、『女學雜誌』は恋愛  
に視点を定めており、『太陽』に見られる  
ような世論の一般的な動向からは色々な点  
で異なっているのがわかる。疑いもなく  
『太陽』が世間一般の意見を反映している  
ことは、他の文学的な証拠を検討すれば証  
明できるだろう。たとえば、流通部数は少  
ないが非キリスト教的な視点から書かれて  
いる文芸雑誌『明星』の一九〇一年五月第  
一二号を見ると、「女詩人」と題された小  
説が載っている。この物語は、草村北星  
(一八七九―一九五〇)によるもので、道子  
という名の「女詩人」の話である。評論家  
中島美幸によると、「女詩人」という言葉  
は、当時、自由奔放な意気を持った女性と  
いう意味で使われていたという。<sup>(77)</sup>道子は裕  
福な貴族との結婚を拒絶する。彼女の恋愛  
観は、『太陽』を見れば容易に目につくよ

うな、大多数の当時の進歩的なインテリが持っていた観念を反映する非キリスト教的な視野の中にある。道子は、「……戀愛は性欲とは違ひますよ、性欲の満足は結婚で得られませうけれども、妾戀愛は結婚によりて何等の影響も受けないものだと思ふ……本當に純潔清淨の戀愛と云ふものは妾純粹に自由を得たる個人と個人の間になければならぬのだと信じてゐます。基督教で愛を説きますのは多少妾の戀愛に似通ふ所があるけれども、大半人類の現世的幸福を基礎として説くのですから、絶對だとは申されませんわ。」と言っている。

## 結 論

雑誌『太陽』のページ上で恋愛問題が最も人々の注目を集めたのは、一八九五年から一八九七年までの数年間であったことは驚くに当たらない。ほとんど恋愛問題の専門雑誌ともいえる『女學雑誌』が創刊され、透谷の「厭世詩家と女性」が世に出たすぐ後の数年間であるからである。しかし、こ

の時期の後はこの問題に対する興味がすっかりすたれてしまう。実際、この調査の対象とした時期の最後まで、年間の発行数と各号のページ数の多さを考慮に入れると、恋愛についてはほとんどページの割当がなくなつたといえる。その理由は、疑いもなく『太陽』のような一般大衆向けの雑誌の性質にあった。インテリだけ、それもその一部だけが興味を持つ話題に大きなスペースを割くわけにはいかなかつた。出版元の博文館の主な目的は、できるだけ多くの部数を出し、少人数だけが興味を持つ話題の記事は効果的であるはずがないのである。

それでも高山樗牛のような、出版社にコネのあつた作家のエッセイがたまに掲載されてきたことには留意しておくべきだろう。博文館のお抱え作家だけでも誌上で恋愛論を展開させていたことも、やはり商業上の圧力による決定であつたのかもしれない。『太陽』が表現していた見解は、多数の上に多岐にわたつており、特にこれという編

集方針は認められない。やはりこの雑誌の読者層が大衆であつたことを考えれば、各様の政治的信条の意見を代表しようとしていたことは当然といえるだろう。もし偏りがあるとすれば、作家というものは相対的に自由主義に傾くものであり、『太陽』誌上で社会問題についてコメントを書いていた若い教育のあるインテリ層も、どちらかというと前衛的であつた。また、各文芸編集者も検閲じみた考え方や、古風で恋愛を不道徳であるとする時代後れの考え方に対して、ペンの鞭をとるのに吝かではなかつた。しかし、この雑誌が代表していた各種各様の意見の中に、一般大衆は、こと実際の結婚や交際になると、まだかなり保守的であつた証拠を垣間見ることが出来る。

高山樗牛が紹介したエロスに重点を置く考え方は、恋愛に関する議論へのユニークな貢献であつたといふべきだろう。恋愛に関する透谷と巖本の著述には、目立つほどにエロスが不在であつたことを考えれば、この貢献はぜひともなされるべきものであ

った。本論の調査対象期間中の『太陽』に、恋愛に関して、注目に値するような主要な理論的貢献がなかった(鏡花と巖本による記事は例外といえるかもしれない)ことは、やはり大衆向けの雑誌であり、その読者よりも進み過ぎた意見を載せて波風を立てることを恐れたということの一事に尽きるようである。

一方『女學雜誌』は、恋愛に重点を置き、恋愛についての論議に多くの重要な貢献をなしている。透谷の「厭世詩家と女性」は、<sup>76</sup>いうまでもなく最も重要なものであるが、上記に挙げた巖本善治の著述も、また桜井鷗村や三輪花影・青柳有美といった巖本のグループに属する作家達の著述も、男女同権の考えを広め、恋愛そして女性の教育が温かく育まれる温室というキリスト教的な家庭の理想像の種時きに皆それぞれ有意義な貢献をした。巖本とその後継者達は、北村透谷の著述ではわずかにほのめかすだけで片付けられていた生理学的土台を恋愛の概念に築いたのである。鈴木貞美が指摘す

るように、生理あるいは生理学的女性観と性的本能一般の方向へ視点が移動したのは、恋愛論争に高山樗牛が介入してから後に起こったことである。「性慾無きところに人生幾何の價値ありや」と「美的生活を論ず」で書いたように、樗牛は『太陽』誌上で性的本能優先主義の意見を率直に展開した。<sup>78</sup>

『女學雜誌』では、編集者のキリスト教的な観念から重大な修正がなされているので、このような観念は間接的にしか現われていない。しかし、いくら変更されていてもこのような観念が垣間見られることは、ここで引用した巖本や有美の記事を読めば簡単に確認できる。一九〇二年以後は、ゾライズムが、永井荷風(二八七九〜一九五九)や小杉天外(一八六五〜一九五二)らの作品などを通して日本文壇の主流になった。<sup>79</sup>ある意味で、この考え方は、特に『女學雜誌』で頻繁に扱われ、『太陽』の高山樗牛の言説で明確化された恋愛論に見られる生理決定論を受け継ぐものである。ゾライズ

ムは、革命的な面がないわけではないが、総合的には徹底的に保守的な考え方で、後には昔の女性観と同じくらい後退的ともいえる戦前の良妻賢母のスローガンへと発展していった優性説につながるものである。

しかし、恋愛観と、その新しさ、そしてそれが男女両性に与えた自由解放的な効果にもどってみると、透谷・巖本、そして後に樗牛などといった主要な思想家が詳しく解説したこの思想は、『太陽』誌上でかなり大きな声を得、『女學雜誌』誌上で積極的に世に広める全面的な後押しを得たと結論することができるだろう。そういう意味では、普通なら『女學雜誌』のようなごく少数のインテリの一部だけを読者に持つ小さな雑誌の誌上に限られているはずのかなり急進的な概念の種を広く蒔く上で、『太陽』のような大衆向けの雑誌が非常に重要な役割を果たしたと言いうことができる。したがって『太陽』は、『女學雜誌』のような同人雑誌にだけ声を持つような考え方を世に広め、オピニオン・メーカーとして社

会に非常に大きな貢献をしたといえるだろう。透谷のようなインテリが一八九〇年代に展開した恋愛という新しい概念は、『太

陽』や『女學雜誌』のような雑誌の存在がなければ、一般大衆の意識にこれほどまで広まることはなかったはずであると絶対的

確信をもって言いけることができる。

付録 『太陽』恋愛関係記事リスト

年	卷	号	頁	欄	題名	著者
一八九五	一	五	一二五—一七	家庭	愛と婚姻	鏡花
〃	〃	八	三五—一八	文學	戀愛小説	水谷不倒
一八九六	二	五	一四五—一八	家庭	家庭は國家なり	巖本善治
〃	〃	〃	二二七—三七	教育	再婚と貞節との關係	元良勇次郎
〃	〃	〃	一三九	文學	啞の戀	
〃	〃	〃	一三九—四〇	文學	戀愛は陳腐なり	福羽美静
〃	〃	〃	一七二—三	教育	女子の情育	イングリッシマン新聞所載
〃	〃	〃	二二三—九	家庭	女子の結婚に関する裏面の觀察	
〃	〃	〃	一八	家庭	未亡人の情愛	巖本善治
〃	〃	〃	一二七—九	家庭	男子、妻に對するの務め	藤井宇平
〃	〃	〃	二二	家庭	婚姻論	巖本善治
〃	〃	〃	九四—五	家庭	自由結婚の趣意	藤井宇平
〃	〃	〃	一〇四—九	家庭	婚姻論(續)	藤井宇平
〃	〃	〃	一〇四—九	家庭	戀愛文字とシユムボシウム	泉鏡花
一八九七	三	二	一七—一八	文學	戀愛詩人	
〃	〃	〃	一一四	文學	學海翁の戀愛論	
〃	〃	〃	一二四	文學	學海翁の戀愛論	
〃	〃	〃	一一〇—二	家庭	男女禮節(續)	石井泰次郎

一八九七	三	一六	一一七一九	家庭／禮式	男女禮式(續)	石井泰次郎
〃	〃	一七	五〇一一	時評／文學	戀愛の計算	
〃	〃	〃	五一	時評／文學	小説中に顯はれたる現代の女性	
〃	〃	〃	一一七一九	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	〃	一一八	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	一九	一〇〇	家庭／庭訓／家政小言	(四) 女子の獨立	寒澤振作
〃	〃	〃	一〇六一九	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	〃	一〇六一九	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	二〇	一〇六一九	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	二二	一一二一五	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	二二	一一〇一二	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	二三	一一七一二〇	家庭／禮式	男女禮節(續)	石井泰次郎
〃	〃	二四	二四四	海外	ロメオ及びジュリエットの遺體	
一八九八	四	三	三六	時事論評／文藝界	心中と心中物	小杉愠邨
〃	〃	〃	八一—八	歴史及び地理	本邦上古男女の風俗	
〃	〃	五	二三六—七	海内彙報／文學美術	裸體畫是非	
〃	〃	八	一二四—?	小説及雜俎	神聖の戀愛	三宅青軒
〃	〃	二	三七	時事論評／文學界	一夫多妻の是非	
〃	〃	一三	二四四—五	海内彙報／文學美術	裸體畫事件の公判	
一八九九	五	四	八一—九二	小説雜俎	日出度心中	幸堂得知
〃	五	五	一五一—六二	家庭談叢	夫の性行好悪を知るべきこと	鼓玉女子
〃	〃	〃	一七二—六	家庭談叢	男女交際の事	佐々浪子
〃	〃	七	一三一—九	論說	支那文學に現はれたる女性	笹川種郎
〃	〃	九	一六一—二	家庭談叢	男女交際の事を讀む	橘長成
〃	〃	〃	一七〇—二	家庭談叢	米國の夫人	冲恵子
〃	〃	二二	一六九—七一	家庭談叢	夫婦の事	佐々浪子

一八九九	五	二四	八一一九七	小説雜俎	鑽夫の戀	江見水蔭
一九〇〇	六	三	四九一五九	小説雜俎	詠向色男	幸堂得知
〃	〃	一五	一二九一三〇	海外事情	歐州の婦人保護法	巖南生
〃	〃	〃	一三四	海外事情	夫婦喧嘩の道具	
一九〇一	七	四	一〇三一六	小説雜俎	戀のをとめ(新體詩)	武島羽衣
〃	〃	九	一一二一三	小説雜俎	戀ひ草(三株)	塩井雨江
〃	〃	一〇	一五三一四	家庭	女大學に就いて	井上哲次郎
〃	〃	一二	四〇一	文藝時評	所謂戀愛文學	高山林次郎
〃	〃	〃	四一	文藝時評	吾に戀せる女ありとせよ	高山林次郎
〃	〃	一四	四一	文藝時評	何が故ぞ	高山林次郎
〃	〃	〃	四一	文藝時評	貴きかな是の質	高山林次郎
〃	〃	〃	四一	文藝時評	性慾	高山林次郎
〃	〃	〃	四一	文藝時評	性慾の動くところ	高山林次郎
〃	〃	〃	四二	文藝時評	性慾の醇化	高山林次郎
〃	〃	〃	四二	文藝時評	價值なり、名目に非る也	高山林次郎
〃	〃	〃	四三	文藝時評	ロマンチックを論じて我邦文藝の	大塚保治
一九〇二	八	四	一一二八	論說	現況に及ぶ	
〃	〃	〃	〃	論說	理想の美人(カーウイズ作)	中内蝶二訳
〃	〃	〃	〃	論說	久遠の女性	姉崎正治
〃	〃	〃	〃	論說	永遠なる女性を讀みて	大町桂月(本文なし)
一九〇三	九	四	一〇六一八	小説	夫婦	国木田独歩
〃	〃	五	六四一七四	論說	虚無黨の女	柳川春葉
〃	〃	七	一五三一六〇?	文藝時評	夏のひとつ	与謝野晶子
〃	〃	一〇	一〇五一一九	小説	戦死者の妻	内田魯庵
〃	〃	一二	九七一一九	小説	時世と女子教育	
〃	〃	〃	一四四一五	文藝雜俎		
〃	〃	一三	二一七	評論之評論		
〃	〃	一六	一一五三三	小説		

一九〇四	一〇	一	一七六
〃	〃	四	一四七—九
〃	〃	八	一二三—三〇
〃	〃	一〇	一五一
〃	〃	一二	一三四
〃	〃	〃	一三六
一九〇五	一一	八	一九二—五
〃	〃	一〇	八一—九七
〃	〃	〃	一五三—七

讀者文壇  
 文藝時評  
 文藝  
 文藝  
 文藝  
 文藝  
 文藝  
 文藝  
 文藝／文藝時評

學生對女學生  
 心中お小夜新七を評す  
 醉美人  
 照手姫的主人公  
 夕舟  
 忍戀  
 愛染明王とは戀愛の神か  
 小妾記(小説)  
 裸體哲學

某教育家  
 大町桂月  
 永井荷風  
 長谷川天溪  
 与謝野晶子  
 川田順  
 釈清潭  
 川上眉山  
 長谷川天溪

注

本稿執筆に当たり、国際日本文化研究センターにおいて共同研究に参加し、同センター図書室所蔵の『太陽』および『女學雜誌』を利用していただいたことを感謝し、ここに記します。

- (1) 鈴木貞美「創刊期『太陽』論説欄をめぐって」『日本研究』「国際日本文化研究センター紀要」第三集、一九六六年、六三頁。
- (2) 鈴木、(1)に同じ、六四頁。
- (3) 鈴木、(1)に同じ、六四—六頁
- (4) 磯田光一『思想としての東京—近代

文学史ノート』講談社文芸文庫、一九九〇年、五二—六一頁。

(5) 山崎正和『不機嫌の時代』講談社学術文庫、一九八六年、一三四頁。

(6) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究(八)』岩波文庫、岩波書店、一九七八年、一八七—二〇二頁。

(7) 富田康之「恋の型」西田勝編『恋歌恋物語—文芸にあらわれた恋 人生 死』北樹出版、一九九五年、一〇六—九頁。

(8) 西田勝「恋と文芸」西田勝編『恋歌恋物語—文芸にあらわれた恋 人生

死』北樹出版、一九九五年、一〇五—三四頁。

- (9) 富田、(7)に同じ、一〇六—九頁、Keene, Donald『World Within Walls: Japanese Literature of the Pre-Modern Era』Holt, Rinehart and Winston, New York, 一九七六年、一六三頁。Rogers, Laurence『She Loves Me, She Loves Me Not: Shinju and Shikido Okagami』『Monumenta Nipponica』第49巻第一号、一九九四年、三一—六一頁。
- (10) 野口武彦『近代日本の恋愛小説』大阪書籍、一九八七年、一一—二頁。

- (11) 野口 (10)と同じ、一一二頁。
- (12) 野口 (10)と同じ、一三一六頁。
- (13) Noguchi, Takehiko 「Love and Death in the Early Modern Novel: America and Japan」 Craig, Albert, M. (編) 『Japan: A Comparative View』 Princeton University Press, Princeton, 一九七九年、一六五頁。
- (14) Schalow, Paul G. 「Love in edo Literature」 『Kyoto Conference on Japanese Studies』 第3巻『International Research Center for Japanese Studies/The Japan Foundation, 一九九四年』 二六二—四頁。
- (15) Keene, (9)と同じ、四一七—一八頁。 Kornicki, Peter F. 『The Reform of Fiction In Meiji Japan』 Ithaca Press for the board of the faculty of Oriental Studies, Oxford University, London, 一九八二年、二九—三二頁。
- (16) Keene, (9)と同じ、四一七頁。 Kornicki, (15)と同じ、一〇六頁。
- (17) 野口 (13)と同じ、一六六—七頁。
- (18) 忽郷正明、飛田良文 『明治のことは辞典』 東京堂出版、一九八七年、六三—二頁。
- (19) 森岡健二 (編) 『改訂近代語の成立—語彙編—』 明治書院、一九九一年、六一頁。
- (20) 森岡 (19)と同じ、六一頁を引用。
- (21) 森岡 (19)と同じ、五六頁、忽郷他 (8)と同じ、六〇二頁。
- (22) Kimmonth, Earl H. 『The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought: From Samurai to Salary Man』 University of California Press, Berkeley, 一九八一年、三八五頁。
- (23) Smiles, Samuel 『Self Help With Illustrations of character and Conduct』 Ward, Lock & Co. Ltd, London and Melbourne 『The World Library』, 一九五九年、四八頁。
- (24) 樺島忠夫、飛田良文、米川明彦 『明治大正新語俗語辞典』 東京堂出版、一九八四年、三三一頁。
- (25) 藪禎子 『透谷・藤村・一葉』 明治書院、一九九一年、六頁。
- (26) 藪 (25)と同じ、六一—七頁。
- (27) Smiles, 一八七一年、三三四頁。
- (28) 忽郷他 (18)と同じ、六〇二—三頁。
- (29) Hall, Ivan Parker 『Mori Arinori』 Harvard University Press, Harvard, Massachusetts [Harvard East Asian Series 68], 一九七二年、二五—三頁。
- (30) Hall, (29)と同じ、一四九頁。
- (31) Brownstein, Michael C. 『Jogaku Zasshi: The Founding of Bungakukai』 『Monumenta Nipponica』 第55巻第3号、一九八〇年、三二—一頁。
- (32) 巖本善治 「理想の佳人」 一八八八年、笹淵友一編 『女學雑誌・文學界集』 『明治文學全集32』、筑摩書房、一九七三年、一三一—四頁。
- (33) Pierson, John D. 『Tokutomi Soho, 一八六三—一九五七: A Journalist for Modern Japan』 Princeton University Press, Princeton, 一九八〇年、四五—三頁。
- (34) 徳富蘇峰 「愛の特質を説いて我邦の小説家に望む」 一八八九年、平林一編 『民友社文學集 (二)』 『民友社思想文學叢書第六卷』、三一書房、一九八四年、三〇—五頁。
- (35) 徳富蘇峰 「非戀愛」 一八九一年、平林一編 『民友社文學集 (二)』 『民友社思想文學叢書第六卷』、三一書房、一九八四

年、四七—九頁。

(36) 山路愛山「戀愛の哲學」一八九〇年、岡利郎編『山路愛山集(二)』民友社思想文學叢書第二卷「三一書房、一九八三年、七—八頁。

(37) 巖本善治「非戀愛を非とす」一八九一年、笹淵友一編『女學雜誌・文學界集』明治文學全集32』筑摩書房、一九七三年、三九—四〇頁。

(38) 北村透谷「厭世詩家と女性」一八九二年、勝本清一郎編『北村透谷全集』岩波書店、一九五五年、第1卷、一八五頁。

(39) 透谷、(38)に同じ、一八五頁。伊藤整『日本文壇史—新文學の創始者達』第2卷、講談社、一九五四年、三四—四一頁。

(40) 伊藤整「近代日本における『愛』の虚偽」『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫、岩波書店、一九八一年、一三—一五四頁。

(41) 透谷、(38)に同じ、二五—四頁。

(42) 太田正紀『近代日本文芸試論—透谷・藤村・漱石・武郎』桜楓社関西支社、一九八九年、二九頁。リース・モートン「与謝野晶子と近代の恋愛」『無限大』第94号、一九九三年、一二—三頁。

(43) 透谷、(38)に同じ、二六〇頁。

(44) 森山重雄「北村透谷—エロスの水脈」日本図書センター、一九八六年、二—一頁。

(45) 中村和子「『厭世詩家と女性』論」透谷研究会(桶谷秀昭、平岡敏夫、佐藤泰正)編『透谷と近代日本』翰林書房、一九九四年、三四—六頁。

(46) 透谷、(38)に同じ、二六—四頁。

(47) 太田、(42)に同じ、三二—三頁、中村、(45)に同じ、三四—七頁。

(48) 北村透谷「手記および書簡」一八九三年、勝本清一郎編『北村透谷全集』岩波書店、一九五五年、第3卷、二二—三—六頁。

(49) 北村透谷「粹を論じて『伽羅枕』に及ぶ」一八九二年、勝本清一郎編『北村透谷全集』岩波書店、一九五五年、第1卷、二六—八頁。

(50) 黒古一夫「北村透谷論—天空への渴望」冬樹社、一九七九年、二〇—三四頁。

(51) 北村透谷「『伽羅枕』及び『新葉末集』」勝本清一郎編『北村透谷全集』岩波書店、一九五五年、第1卷、二七—七頁。

(52) 野口、(13)に同じ、一七〇頁。

(53) 北村透谷「『歌念佛』を讀みて」勝本清一郎編『北村透谷全集』岩波書店、一九五五年、第1卷、三四—九頁。

(54) 北村透谷「處女の純潔を論ず」勝本清一郎編『北村透谷全集』岩波書店、一九五五年、第2卷、二六—六頁。

(55) 黒古、(50)に同じ、二〇八—二一〇頁。

(56) 黒古、(50)に同じ、二一〇頁。

(57) 関井光男「性愛と生命のエクリチュール」鈴木貞美編『大正生命主義と現代』河出書房新社、一九九五年、九二—頁。

(58) 相原和邦「共同研究報告」『太陽』と「女」—創刊期の様相』『日本研究』第13卷、国際日本文化研究センター、一九九六年、一四五—一五三頁。

(59) 宮本百合子「近代の女性文學」藤村作、西尾実監修『日本文学史辞典』日本評論新社、一九五四年、一七〇頁。

(60) Ryan, Marleigh Grayer [Japan's First Modern Novel: Ukigumo of Futatabei Shimei] Columbia University Press, New York and London, 一九六五年、二七—三頁。二葉亭四迷『浮雲』一八八九年、畑有三、安井亮平注釈『二

- 葉亭四迷集「日本近代文学体系4」角川書店、一九七一年、一一七頁。
- (61) 樋口一葉『にこりえ』一八九五年、和田芳恵注釈『樋口一葉集』日本近代文学体系8』角川書店、一九七〇年、一七八—二〇八頁。Daly, Robert Lyons 『In the Shade of Spring Leaves: The Life of Higuchi Ichijo, A Woman of Letters in Meiji Japan』Yale University Press, New Haven and London, 一九八一年、二一八—二四〇頁。
- (62) 野口、(13)と同じ、一七六頁。
- (63) 野口、(13)と同じ、一七七頁。
- (64) 小長井晃子「女學雑誌に見る〈恋愛〉観の一面—巖本善治と青柳有美を中心」『国文目白』第三十五号、一九九六年、二二頁。
- (65) Harootyan, H. D. 「Between Politics and Culture: Authority and the Ambiguities of Intellectual Choice in Imperial Japan」『Japan in Crisis: Essays on Taisho Democracy』Princeton University Press, Princeton, 一九七四年、一四四—一五四頁。
- (66) 鈴木貞美『生命』で読む日本近代—大正生命主義の誕生と展開』NHKブックス「76」、日本放送出版協会、一九九六年、五〇—一頁。関井、(57)と同じ、八八頁。
- (67) 笹淵友一「『文學界』とその時代」序説抄』笹淵友一編『女學雑誌・文學界集』明治文學全集32』筑摩書房、一九七三年、四〇九—四一九頁。
- (68) 笹淵より引用、(67)と同じ、四一七頁。
- (69) 笹淵、(67)と同じ、四一七頁。
- (70) 尾崎紅葉「戀愛問答」、伊原青々園後藤宙外編『唾玉集(抄)』、『近代文學回想集』日本近代文学体系60』角川書店、一九七三年、六五頁。
- (71) 小長井、(64)と同じ、二七頁。
- (72) 青山なを、野辺地清江、松原智美『女學雑誌諸索引』慶応通信、一九七〇年、一一六頁。Brownstein (31)と同じ、三一—三三六頁。
- (73) 伊藤整『日本文壇史—悩める若人の群れ』第3巻、講談社、一九五五年、三八頁。
- (74) 小長井、(64)と同じ、二二頁。
- (75) 小長井、(64)と同じ、二二—三三頁。
- (76) 小長井、(64)と同じ、二三—四頁。
- (77) 中島美幸「日露戦争下の女性詩」『日本近代文学』第55集、一九九六年、六一—七五頁。
- (78) 鈴木、(66)と同じ、六一—二頁。
- (79) 鈴木、(66)と同じ、六五—六頁。